

科学研究費成果報告書「日本近代史料に関する情報機関についての予備的研究」（基盤研究  
(B) (1)、平成9・10年度、研究代表伊藤隆、課題番号：09490005）より

## 9 山崎 有恒氏

やまざき ゆうこう 立命館大学・文学部・助教授

日時：1998年7月31日

出席者：伊藤隆 伊藤光一 勝村哲也 有馬学 櫻井良樹 季武嘉也 村瀬信一  
梶田明宏 古川隆久 武田知己 小宮一夫 矢野信幸

**伊藤** それでは、第9回目の研究会を行いたいと思います。きょうの報告者は立命館大学の山崎有恒先生です。きょうは報告のレジュメがきちんとできているという、たいへんありがたい状態です。髭の勢いでよろしく願いいたします。喋る時間は何分でも構いません。そのかわり、途中で誰かが質問したら、それに答えてください。

**山崎** 分かりました。お誘いをいただきまして、ご報告をさせていただきますことになりましたけれども、伊藤先生のほうからアバウトに、何か研究と資料について話してくれという依頼でしたので、何をやっていいのかわちよつとよく分からないまま、とりあえずまとめてみました。もしこちらの研究会での報告の趣旨とずれているところがあればむしろ、聞いていただければ修正できるところは修正してお話いたしたいと思います。では、基本的にどんな研究をやっていて、それについてどんな資料館でどんな資料を見たかという、そんな話をしようと思います。

まず最初に、私がここ数年取り組んでいるテーマというのは、近代日本の河川と政治研究ということで、治水とか港湾、その他、インフラストラクチャー整備と政治家の関係とか、特に川と治水をテーマにいろいろと見ております。

基本的に治水の問題というのは、現在考えているより遙かに明治期においては重い問題で、明治初年にかなり河川が氾濫して、それが非常に国家財政や地方財政に重くのしかかる。しかも、災害でありますので緊急に対処せざるを得ないという意味では、他の政治課題と比べても負けず劣らずの重要性があると考えています。

特に地方にとってはたいへん重い場合があります。富山県などは予算が30万円ぐらいしかないんですけれども、そこが1回の水害で60万円の復旧費を背負うということで、一瞬にして破産状態になり、仕方がないので内務省に泣きつく。そのぐらい地方財政にとっては極端な話、最大費目になる場合が水害時にはままあるので、そんなに軽視できないんですね。

国家レベルでも、海軍費を削るか、それとも治水費かなんていうぐらい、トレード・オフの関係になることがときどきあります。

基本的に大きな流れとしては大体4つありまして、まず1つ目は明治初年の話になるんですけども、非常に川が氾濫をするので、オランダ技術を導入しようという話があるんですね。簡単に言えば、世界最高の治水技術を持つといわれていたオランダから技師を招いて、日本の川を委ねるということです。この辺りで基本的に近世には、ひたすら堤防を築いて洪水が起きないようにすることを重視したやり方をとっているんですが、オランダの技術というのは、そういう技術よりもむしろ低水工事といわれる技術で、それを推進することになります。

低水工事とは、川の屈曲部を直線化して、川中の障害物を取り除いて、護岸工事をやって、さらに浚渫を施して川を水路として使う運輸網を考えたやり方で、これを日本の川に施してやろうとするんです。

ところが、自然環境が全然違いすぎるので合わない。しかし、大久保利通辺りを中心に、河川と港湾を一体化させた運輸網整備を行おうとして、そのためにオランダ技術はかなり積極的に導入されます。これは当然のことながら港とも絡んできまして、河口に港を使って沿岸航路と内国水運を連動させることがポイントで、そういう形での港湾整備というものにも使われます。あとで資料のところ出てくるので参考知識として、たとえば、北上側の河口の野蒜、九頭竜川の河口の坂井、淀川の河口の大阪の築港が行われていくのもこの時期のことです。

しかし、日本の川というのは普段はいいんですが、雨が降ると怒濤のように激流が流れ込むので、下手に川の曲度を直すと大水害につながるんですね。そのため、基本的にはオランダ技術は日本には合わなかったというふうにされているんです。しかし、オランダ人は、これはいかんということがすぐ分かりますので、日本に合わせた形ではどうするかというと、山林の保護をして、それから砂防ダムを作って、堤防もちゃんと築いてという形で、総合的なきちんとした国土計画をやろうと考えるんですが、それは金がかかるという理由で松方あたりが解雇しまして結局、面倒くさいからコンクリートで固めてしまえという形で、堤防を築いていくやり方に切り替わるのが大体、明治13年のことです。それで、お金がかかるので治水費に関しては地方に委ねます。ここから地方財政の問題がすごくなっていくということになります。これが第1期ということだと思います。このコンクリートで固めるという方針は、このあと殆ど変化することなく現在に至っていると思われま

2番目としては、治水費が地方の負担となってからあとなんですけれども、そうなるとうまくと多くの府県で治水費というのがかなりの重荷になりまして、いろんな県の財政の状況を調べているんですけども、収入の3割を越える支出が治水費で出ていくと財政が維持できなくなるんですね。ですから、これより3割以上の県をAグループにしています。それで、3割以内だとまだ県内で処理できるので、県内で予算をどうするか——川にかかるか山にかかるかという対立になるんですね。これがBタイプになります。Aタイプになると対立してられない状況になるので、何とかして中央に金をくれと言うしかないとい

う、かなり悲惨に状況になっているんですね。

それで、公費運用の先行研究というのは、有泉さんという方が山梨をフィールドに研究されているんですが、有泉先生の研究というのは、基本的にはBグループの研究で、あまり深刻ではないんですね。ですから、Aグループで生じるような政治的な状況というのは、あまり研究としては反映されていないところがあるので、それをもう少し広げて、AとBを眺める形でもう1回塗り直してみようかと考えています。

そこに“転換A”と書いてあるんですが、これは、もともとは全然氾濫がなくてCとしか言いようがなかった岡

山県が、明治25年に大水害があつて突然Aに変わってしまうというものです。ですから、これは固定的なものではなくて水害の状況で変化しうるんです。

それで、Aに属する県として有名なものでは、富山とか静岡があるんですけども、そうになると財政崩壊が相次いで、国から金をもらうしかないの、国庫補助を求めるベクトルと、それに対応する地方での運動体というものが形成されていき、これがやがて政党の壁を越えた挙県体制につながっていきます。それまで自由民権運動的に県内で対立していたものがなし崩しに崩れて、県が1つの政界を作り始めるというのは大体、こういうものがきっかけなんじゃないかと考えています。これが地元代議士を中心に中央へベクトルをのばして、それが帝国議会の設立を機に水害地域の大連合を作り上げていく。それには水害がない県はもちろん入らないわけですけども、まがりなりにも全国的な組織ができてくるんですね。それが明治25年の治水会という組織であろうと考えています。

その治水会はさらに内務省と提携しまして……といのは内務省は、河川改修をもう1回国が中心になってやりたいという欲望があるのですが、しかし、大蔵省が金を出さないので、むしろ地方のそういう運動に協力して乗っていく形で政府を動かそうとするんです。そこで何かよく分からない地方—内務省提携というものができて、緊縮財政を唱えて金を出さない大蔵省との間で対立構造ができる。それが最終的には内務省側が勝って、明治29年の河川法制定で中央の管轄権が復活し、地方と中央が費用分担をして、コンクリート堤防をひたすら築いていくというのが基本方針として定められると。ここまでが第2期だろうと見ています。

しかし、実際にはいくらコンクリート堤防を作っても天井川化が進むだけで、根本的な解決にならず、しかも川岸の自然が死んでいくというのは、最近の長良川の問題等々で結構いわれていることなんですけども、原点は大体この辺りだろうと思います。

それで日清戦後は第3期なんですが、日本は日清戦争後に経済発展をしますの、地方財政の規模も飛躍的に拡大して、収入が毎年ガンガン増えるんですね。そうになると特にBグループみたいに対立していたところは、もう面倒くさいので、各地域の利益を全部同時に予算に盛り込んでいるという総花的な処理をするようになります。実際、コンクリートで、この時期になると少し時間的・金銭的な余裕が川から生まれてますので、そこで余っ

た費用をとにかく包括的に、教育が足りないといえば教育に、道路が足りないといえば道路に、鉄道が足りないといえば鉄道にぶち込んで、各地域の要求を全部満たそうという、そういう財政処理が急速になされるんですね。典型的な例としては、福井と千葉があります。

こうしていくうちに、何となく地方で1つの政治的なコンセンサスが生まれてきて、知事と地方議会と地方官僚と名望家とマスコミ辺りに、何らかの1つの共通した地方の利益を求めていくような一種独特の空気が生まれてくるんですね。これが地元出身の代議士を通じて中央との確かなパイプを築き、それが政党につながって、利益誘導路線につながっていく状況が、日清戦争後にかなり生まれてくるなというのを地方からいま見ているところです。それが日露戦後に財政状況が悪化し、もう1度、少ない予算をどうするかという問題が再燃してくる。これが第4期と考えています。

第4期は明治末期なんですから、明治43年に大水害が起きまして、特に関東地方はほぼ全滅すると言われるぐらいの大水害に遭う。このときに、それまではコンクリートで川を固めて、これでオーケーかなというふうにみな思っていたので、水害が起きてちょっと驚くんですね。それで危機状況の再認識が行われまして、対処するために臨時治水調査会という調査会が作られます。

ちなみにコンクリートの話なんですから、実は川のコンクリートというのは、最近土木とかの資料ばかり読んでいるものですから頭の中は半分理系になっているんですけど、私が得た浅はかな知識によると、ポルトランド・セメントというのがあって、これは水を弾くセメントで水関係の土木に使われるものなんですから、これは明治維新の20年ぐらい前に開発された世界でも最新技術であつたらしくて、イギリスで開発されてフランスで実用化されたといわれている技術なんですね。オランダはあまりそういう技術は持たなくて、自然を生かしながら石組をしたり、木とか石で作っていくというやり方なんです。ところが、オランダの技術が当初うまくいかなかったときに、イギリスのお雇い外国人が、イギリスの土木の技術を取り入れてセメントにしなさいという話をして、金がかからないならそっちにしようといった経緯があるんですね。ですから、このあとずっとセメントで流れてきていて、やっぱりそれではいかんという話が初めて43年水害のときに出るんです。その段階でいまドイツがやっているような、1回固めたコンクリートをはがして石や木で組み換えていく、最近すごくヨーロッパでやっているやり方ですけども、そういう形での処理というのを本来しておくべきだったんです。

また、そういう計画をちょっと立てるんですよ。それで、国家主導で桂内閣なので、桂は知っての通り官僚閥で、基本的にあちこち押さえ込んでいるものですから、この時期のいいことには、それまであったような大蔵省と内務省との対立とかは一切ないんです。ですから、国が一丸となって1つのグランド・デザインというのを作りやすいんです。それを作って臨時治水調査会にかけて、ある程度考えているような方向に持っていかうとする

んですけれども、地方政界を背景に出てきた代議士たちが利益誘導に走り始めて、政府がやろうとしていることを非常に卑近な政治に切り換えていくという、何とも言えない状況というのが生じるんですね。そうして彼らが狂奔するものですから、政党は押さえようとするんですけれども、それがなかなか上手くいかなくて、そういう三者の思惑——政府と代議士と政党の思惑が交錯する中で、国家が立てたグランド・デザインがかなり歪んでいく。まあ、こうしたあり方というのは、自民党政権に変わらず受け継がれているような気がするんですけれども。そのような状況を見つつ、明治時代の川と政治というようなものをまとめて見ていこうかなと考えているところです。

これが最近やっている研究の大体の構想図というか1つのまとめりなんですけれども、この研究をやる上で一体どんな史料を見ているかというのが2枚目です。まず、地方の県庁文書とか地方新聞とか在地の史料というのを見ないと地方の政界の状況というのは掴めないで、そういうものはいろいろ見えます。その際に使えるのはやはり、県立の図書館、文書館の類ですね。

たとえば、Aグループでいうと、富山県公文書館がいちばん豊富に史料がたくさん残っていて……というか誰もこんなものは見に来ないし、見ても私が初めて見たというやつばかりです。特に川関係は県史でちょっと見ているぐらいで、それも高校の先生が書いたりしていて、あまり県文書館はちゃんと利用していないようなところもあって、行くともっさらの折り目のないやつがいっぱい出てきて非常に楽しいですね。量的にもかなりありますし。

あと、岐阜にちよくちよく足を運んで、最近、先生から、県史をやっておられるようなので、またいろいろお力添えを賜りたいと思うんですけれども、歴史史料館や図書館、県議会の図書室などにちょこちょこ足を運んでは、議会の議事録を見たり、県庁文書を見たり、地方新聞を見たりしています。

他には愛知県公文書館で県庁文書を見ているんですが、あれは殆どないです。県庁文書というのは3分割されていて、そのうちのごくわずか一部だけが県公文書館にあって、大部分は国立史料館にあって、残った一部分は徳川の林政研究所にあります。愛知ですから尾張の徳川というふうに泣き別れになっているということで、そのどれにもそれなりにあるんですが、いちばん多いのはやはり国立史料館ですね。これがAグループです。

Aグループと私が考えているのは基本的に四つあって、富山と静岡、木曾川・長良川のいわゆる濃尾水系、あと淀川とあるんですけど、淀川は服部さんという研究している人が花園大にいますので、そこはその方の成果を適当に取ってくることにして、静岡をこれから見ようかなと思っています。

BCグループというところでは、新潟ですね。新潟は確かに信濃川があるんですけど、ここは改修がかなり早くから進んで国家の金がそそぎ込まれているので、あまり地方的にAグループにならないんです。むしろ、県内で対立する典型的なBパターンになる。そこ

で県庁文書を見たり、北越新報を見たり、福井に行って地方新聞を見たりと。あと、岡山県の総合文化センターというところで地方新聞を見たり、福岡県立図書館で新聞を見たりしてます。

ちなみに、“B 1”と書いてあるのは川側が優勢で、“B 2”と書いてあるのは、川ではないほうが優勢という、そういう分け方です。これはいま詳しく述べる場ではないような気がするのでサラッと書いてありますけれども、まあ、こういうものをいろいろ見てます。

他に県の段階として千葉とか埼玉とか、B 2からB 1というのは、基本的にはB 2なんですけど、そのうちだんだんと川側が強くなって勢力が逆転していくという意味です。群馬もそうです。群馬は、治水費が全くかからなかったのがB 1になる。あと京都と大阪と、こういうものをいろいろ見てます。

しかし、県の公文書館とか図書館の話というのはおそらく、こういう研究会でしたらさんざん出ていらっしゃることだろうと思うので、あまりにも普通すぎてつまらないのでこれはこのぐらいで止めて、質問があれば答えるという程度にしたいと思ってます。

むしろマニアックなやつを少し見ていこうかなというのがBとCで、県の政治的なレベルを考えるのは当然のことながら大事なんですけれども、実際に各地方水系で活躍していた治水家ないしは代議士、中央とのパイプを考える上ではこの辺りの史料というのが極めて重要で、これをどれだけ掘り起こすかというところが、この研究の焦点なんです。

その上でいちばん助かったのは、もともとは埼玉の湯本家というところで眠っていた湯本義憲文書で、これはいま埼玉県立文書館に寄託中でまだ未整理状況なんですけど、これを湯本家のいまご当主からご厚意で見せていただいて、かなりの量があったんですね。湯本というのは大成会系代議士で、国民協会につながる一連の吏党系の代議士なんですけれども、各水害地域を横につなげた連合体である治水会を作って、さらに内務省とのパイプである土木会を作り、さらに明治末期の臨時治水調査会にも出てくるという、この辺りの一連の動きの中核の中核の人物で、治水会と土木会と臨時治水調査会の史料というのが世の中の公文書館のどこを探してもないという状況下では、この湯本家文書の中に入っていた史料が世の中で残っている殆ど唯一の史料なので、これを使って見えています。

利根川の治水に尽力した人で、利根川が氾濫を起こすと湯本家まで水が来るのが5分というたいへん至近なところに住んでいるので、史料がそのせいか水浸しになっていてボロボロの状態で、しかしそれも名誉の負傷とでも言うべきか、ある意味では治水家らしい、いい史料の残り方をしているんですけれども、これをペリペリはがしながら少しずつ見ているというのが正直なところですよ。これはいちばん使えました。この研究が最終的にまとまるとしたら多分、この湯本のおかげです。

**伊藤** これは整理中なんですか。

**山崎** 整理は細々と埼玉県立文書館でやってますが、人手不足なので、カードをやっと撮った段階です。それで、くっついてるやつなんかではまだカードを撮りきってないのもあ

るんです。ただ、はがせるやつははがして一応、カードは撮ったんですが、目録さえできていない。それをこれから目録化していく作業に取り掛かろうかという、そのぐらいの状況ですね。それで、非公開と書いてありますけど、カード撮りをした分からは順次、現所蔵者の許可を取ることを条件に公開を始めてます。

私はその辺りの川関係のものを見ているんですけども、さすがに大成会、国民協会系なので、国政関係の史料も多少はあるんですね。第三議会辺りで吏党系が利益誘導政治をやったときの関係とか、国民協会が創設されて事務局がどう動いていたかみたいな史料も多少、断片の日記とかはあるんですけども、書簡がないんです。しかし、これだけ史料が残っているのに書簡がないわけではないので、まだ湯本家にあるのかもしれないので、調査をかけてみる必要があると思います。日記もあれだけ断片があるところを見ると、ひょっとしたらまとまって残っているのかなという気がします。

**伊藤** 品川文書の中に湯本の書簡があるでしょう。そのコピーを持って行って突きつければ、なんとかなるんじゃないですか。

**山崎** (笑) そうですね。もうちょっとアタックしてみたいなとは思ってますけれども。

それに関して、彼は埼玉の行田なので、行田市の郷土博物館というところがありまして、そこに湯本のバックアップをした政治的な地元での後援団体である忍同志会の史料があるんです。同志会記録もしくは謄録という感じで自分たちで勝手に内部文書を出してまして、そういうものをちょっと見たりしています。

ちなみにこの忍同志会というのは何かというと、旧忍藩士の士族たちが維新期になって落ちぶれて職がなくて困っていたときに、湯本がいろいろ紹介して足袋を作らせるとか……行田足袋というのがあるんですけども……という形で授産事業に全力をあげたんです。それ以来、彼らから忍の恩人と呼ばれていて、湯本が選挙に立つといえば、その同志会が全部バックアップについて選挙活動を繰り広げているんですね。だから、行田とかでの得票率というのは圧倒的なんです。そういう結構固い組織がバックについていたことが、埼玉では吏党系は湯本だけなんですけど、そういう吏党系の弱い埼玉で湯本が安定して当選を続けた背景にはあったようです。これと川が渾然一体となって、常に最高得票を続けていく形になっていったんだろうと思います。

**伊藤** これは、忍同志会が持っていた史料がそのまま……

**山崎** いや、そういうものではありません。

**伊藤** 個人文書なんですか。

**山崎** 为什么呢ね。忍同志会が会報のようなものを出しているんですが、それが残っている。それは、たまたま行田博物館が市内で文書を見ていたときに出てきたらしくて、どこの家から出てきたのかは知らないんですけども、まあ、こういうのがちょっと残っていたりすると。ある代議士を支えていたものが何なのかということを考えるときに、意外とこういうのは役に立つなと思いました。

それから、むしろこちらは有馬さんというか、日比野さんというべきかもしれませんが、福岡県の小郡市史編纂室というところで、湯本とつるんで一緒に治水会をやっていた佐々木正蔵という治水家がいる、筑後川の治水で非常に有名な人なんですけれども、この人の日記というか備忘録の類でかなりメモがあるんですね。それをいま日比野さんが起こして、小郡市史の資料篇か何かに今度載せるという話があったので、これは間もなく形となって出てくると思いますが、こういうものもコピーさせていただいて、その節は有馬先生にたいへん御世話になりました。いろいろと見せていただいております。量的には湯本のほうが断然多いんですけども、そういうものも意外と探していくと、市史編纂室レベルのところには、昨今のブームを反映してチラホラあるんですね。

それからもっとマイナーな治水家では、たとえば、有名なものでは金原明善という天竜川治水で知られる人なんですけれども、これなんかも金原明善記念館みたいな小っちゃな記念館があって、実はこういうケースは他にもあって、そういうところをちゃんと見ていくと意外と文書とかがあったりします。ただ、金原明善に関してだけは、大部分が金原明善の全集に入っておりますので、いちいち行って見るほどの価値はないですね。ただ、彼が作った天竜川運輸という初期の川運輸のことは見ることができる天竜川運輸会社の資料とかがあって、それはあまり収録されてなかったりするので、私は川を運輸関係とともにからめて見ているので、そういうときには非常に役に立っているんです。

他にも富山の西師意とか、絶対知らないと思うんですけども、そういう治水家として非常に有名な……まあ、西は政治家でもあるんですけど、そういう人物の史料とかが、富山県の文書館とか集めた史料の断片で結構入っていたりして……

**伊藤** 富山県の文書館というのは、富山県公文書館ということですね。

**山崎** ええ。富山県公文書館と富山県立図書館ですね。そういうところに分かれてチラホラと入ってますね。富山は残りがいいですよ。あそこは宝庫ですね。

そういった地方治水家の史料も実は断片があるんですけども、まとまった形になってないので、ご報告しにくいんですね。たとえば、大阪港築港をやった西村捨三とか、彼は土木局長あがりなんですけれども大阪府知事にいった男で、彼なんかの史料も実はチラホラとあったりします。

**伊藤** 西村捨三の史料はどこにあるんですか。

**山崎** あちこちに分かれてますよ。彼の書いたものとかは、国立公文書館の内閣文庫にもちょっと入っていたりとか。

**伊藤** 彼の書いたものね。

**山崎** 彼の個人史料という意味ではないですよ。日記とかそういう文書はないです。あと大阪にも断片がちょっとあったりとかですね。でも、断片で拾っているだけなので、何とか文書という形で紹介できるようなものはあまりないですね。

こうして中央とのパイプを見ていく以外に、今度は技術関係者の史料というのがどうし



でも必要になるので、いろいろと見えています。たとえば、マニアックなところでは、建設省の淀川資料館というのがあります、そこが淀川を工事したときの土木事務所が集めていた資料類をそのまま引き継いでいまも持っているというだけなんですけれども、当然ながら淀川治水を担当したエッセルとかリンドウとかデレーケといったオランダ人の関係史料がいくつかありまして、それは一応『オランダ技師関係史料』という形で呼ばれているんですけれども、しかし、これもごく最近、同じタイトルの史料集として出版されてしまいましたので、落ち穂拾い的に見るものはあまりないかなというのが正直な感想です。私が見に行っていた頃は、あまり世の中に出ていない、いい史料だったんですけれども、本になってしまうとちょっと価値は落ちますね。

**伊藤** これはどこから出たんですか。

**山崎** 建設省淀川資料館刊だそうです。非売品で限定500部で関係者に配っただけで、一応、大阪のほうの図書館とかで見られるので、私はくれと言ったら断られたので、そっちで全部コピーしました。

あとは、オランダ技術というのはよく分かるんですけれども、いままでの研究の流れというのは、オランダの技術はどうすごいかみたいな話ばかりで、しかし、オランダ人は工事をやるわけではないので、日本人の土木人を呼んできて、どうやってオランダ技術と日本の技術を融和させながら工事をしていたかという現場での話の研究はないんです。ところが、そういうものは見なければいけないと思ってあちこち探してたら、たまたま福井県三国町の郷土資料館——みくに龍翔館という名前の資料館があるんですけれども、エッセルが設計したという昔の洋風の小学校の建物をそのまま生かした資料館になっていて、そこが持っている加納家文書が出てきました。

加納家文書というのは、エッセルの指導を受けながら現場で土木監督にあたった昔からの土木請負人、親方の家なんです。この家の文書を見ると、エッセルがどういう指導をしつつ、現場の人をどう使いながら、最終的にどうやって築港が行われていくか。材料は何を買ってきて、どこからどうやって集めてきて、それをどういうふうにエッセルの言われるような形に作り変えてとか、納入はどうするのか、金銭的にはどうなっているのかとか。案外大事なそういうベースの部分の研究は殆どなくて、エッセルが描いた何とか理論みたいなやつばかりなんです。だから、以外とそういう泥臭いところを見てみると面白いんですよね。それを加納家文書なんかをいま使って見ているんです。

九頭竜川の河口に港を作るやり方は、オランダ独特のいちばん得意とするやり方なんです。これは基本的に駄目で、川が運んできた土砂で作っても5年以内には潰れるんですね。九頭竜川は完成して、成功したといわれているんです。野蒜は失敗して、坂井は成功したといわれているんですけど、でも、できて殆ど全部5年で埋まるんですね。ですから、やはりオランダ技術は合わなかったのかなあというのが、正直な感じとしてはあるんですね。でも、エッセルの言うことを信じて加納家は一生懸命作っていったという、その過程

は見えるんですね。いまの港は九頭竜川の河口から離して、土砂が流れ込まないようにちゃんと作ってありますけれども、当時は運輸と連動させるというのが狙いでしたから、こういうふうなやり方をやったんだなあ。そのテストケースとして非常に役に立った史料です。まだ書いてませんが。大部分コピーしてきたので、近々これで何か形にしようと思ってます。

それから、政府のほうでそういうものを指導していた古市公威という男がいます。何と名前を読むのかなと思っていろいろ調べていたんですけど、やはり“コウイ”と音読みするみたいです。自分のサインでそういうふうに英語で書いてました。この古市公威という人は、土木史の中では権威ということになっていて、日本の川をセメントで固めて自然を殺した責任者なんですけれども、土木史的にはかなり高く評価されている人です。まあ、確かに水害が起きなくなりますので。それで、古市公威は若い頃にフランスに留学していて、ちょうどフランスで開発されたばかりの技術であるポルトランド・セメントを使った河川関係を見て、それを学んで帰ってきたものですから、帰ってくるや否や喜んでそれを導入していった人です。その技術が買われて技術者で初めて内務省の土木局長になったんですが、この人の関係資料が、東大工学部の土木学科の図書室の中に古市公威文庫という形で残ってまして、これもかなりの量があって段ボールで3箱あるんですけど、全くの未整理状態でほったらかしにしてあるのを勝手に開けて見てきました。フランス留学中の記録というか、メモであるとかですね。

**伊藤** 目録もないんですか。

**山崎** 目録はないです。「その箱を開けて適当に見てください」と言うから、箱を開けて適当に見たらいろいろあって、「ああ、面白い」と思って。

**伊藤** どうしてこれは見つけたんですか。

**山崎** 古市といたら東大工学部の教授だからあるだろうと思って行って、そしたらあったというだけですけどね。それに『古市公威』という伝記があるので、伝記ができていたんだったら史料があるだろうと思って、あるとしたら土木学部の図書室に寄贈されているだろうと思ったので行ってみたら、やっぱりありましたね。それで、その伝記を作ったときの史料も全部集めてあって、ちゃんとファイルされているんですよ。無茶苦茶使いやすかったですね。それも全部コピーしてきて、製本して私の研究室に3冊……

**伊藤** どうするつもりもないみたいですか。

**山崎** ないんじゃないですかね。

**伊藤** 古市は爵位もらっていませんでしたか。

**山崎** もらってます。立派な男爵さまですよ。

**伊藤** 男爵だね、よしよし。

**山崎** そういうことを考えているわけですね。なるほど（笑）。

**伊藤** これはなんとかしてもらっちゃおう（笑）。

**山崎** 古市に関してなら、ぜひ私に仕事をさせてくださいよ。

そうだ、吉川の人物叢書で何かという話がありましたけど、古市なら書けますよ。他に私のやっているのはマイナーで、湯本とか書いてもどうしようもないので困ってたんですけど。

**伊藤** 湯本でもいいなあ(笑)。

**山崎** 湯本でよかったらいくらでも書けますよ。他に書ける人いないでしょう、多分(笑)。

**伊藤** 君はしかし、公約しても実現はなかなかできないから、そっちのほうが心配だよ。(笑)

**山崎** 分かりました。それは全く私も心配です。

というわけで、古市に関しては伝記史料の類がいっぱいあって、意外とこれが使えたなというのが正直な感想ですね。なんだかんだいっても、技術者の側の中心人物ですからね。

ただ、政治的な動きを古市がした部分についての史料は薄いです。それで伝記史料をいくつか見ていく中で、伝記に書いてなかった事実としては、井上馨とかなり近かったみたいです。それで、技術者だけれども意外とこの人は政治家的な人だなと土木局内でも評価されていて、井上馨が内閣総理大臣になったときに初めて土木局長に抜擢されているというのは政治的な背景があるみたいです。やっぱり、井上馨も治水関係ではちょっとこりたみたいですね。というのは、井上馨が総理大臣の時代に治水会ができたとか結構、議会で問題になってくるので、あまりこれを煽らないほうがいいという発想になって、最終的には古市以後、技術者で土木局長になる人はしばらくまたいなくなるんですよ。鈴木とか普通の人に代わってしまいますので、そういう面ではテストケースだったのかもしれない。

それからマニアックなところでは、京都にあります琵琶湖疏水記念館という、役にも立たない小さな記念館があるんですけども、ここで唯一いいのは、田辺家文庫というのを持ってまして、田辺朔郎というのは、琵琶湖疏水を設計して作った技術者なんです。運輸型の疏水というのは、これが最後といわれているんですよ。その田辺の原史料を田辺家から寄託されて全部持ってるんです。ただ、使うものが何も分かってない上に保存の仕方も目茶苦茶なので、あれは何とかしないと潰れるなというのが正直な感想です。しかも、それを展示したりしているんですけど、あまり見に来ないので、あの疏水記念館がいつまでもつか分かりません。

これは余計な話なんですけど、今年、学芸員実習で博物館見学があるので、ここへ連れて行って、学生たちに入る前に、いまから行く記念館がいかにか駄目か、お前たちが学芸員になった場合、どう建て直すかという課題のもとにレポートを書けと言って見させたら、たいへんいいレポートが続々と出てくるのではと。学生たちの改革意欲溢れる熱意のあるプランをぜひこの記念館に届けようかと思ったんですけど、止めました。

さて、来年の9月から私事ながら米国留学1年もらいました。実はこの研究に関しては、

海外の土木資料を見なければ話にならないということもあるんですが、まだ見たことがないので、オランダのやつとかアメリカのやつとかを1年間の間に見てこようと考えてますので、またそれは帰ってきたあと、何かいい情報がありましたらお伝えするというので、この辺りは終了します。

さて、ページをめくると今度はガラッと話が変わるんですが、最近やり始めた全然別の研究テーマがありまして、近代日本の植民地と競馬ということで、これは皆さんあまりご存じないようなんですけれども、関東州ができて以来、日本の植民地には必ずといっていいほど競馬場が設けられているんです。たとえば、いちばん最初にできたのは関東軍直営の大連競馬場なんですけれども、以下関東州だけでも7つの競馬場があって、やがて満州国ができると国立奉天競馬場以下9競馬場が作られたりしていて、ただ、これはどんな満州関係を研究している本とか関東州を研究している本とかを読んでも、競馬場の存在なんていうのは出てきたこともないんです。ところが、事実として競馬場が植民地に設けられていたということに、どうもいろんな意味があったような気がするんですね。それを歴史的にきちんと研究してみようということで最近いろいろやっています。

その第1段階としては、まず関東州ができたあとに最初に日本の植民地競馬ができるんですね。大連競馬場以下7競馬場ができる。これは何で作ったのか。これは関東軍直営なんですけど、実は日露戦争で日本の輸送補給路は壊滅的な打撃を受けました。というのは、日本の馬があまりにも小型で大陸での作戦行動にむかず、特に輸送補給の際に馬がみんなバタバタ倒れてどうにもならないことがありまして、これが日露戦争が苦戦に陥った1つの理由であったんです。

そこで日露戦争後に、陸軍は馬匹改良というものに取り出していき、外国の優れた種牡馬を買ってくるんですね。ところが、どんない種牡馬を買ってきても、はっきり言って母親がろくなのがいないので生まれる子供も駄目なんです。最近の話で言うと、サンデーサイレンスとかを買ってきても、繁殖牝馬の質が悪いと駄目なんです。日本のサンデーサイレンスで成功しているのは結局、母親も全部シャダイファームが外国から買いつけてきているということで、両方とも良くないと良い子は生まれません。これは端的な例なんですけれども、それがこの時代に起きて、それで繁殖牝馬を揃えなければいけない。

ところが、これがものすごく金がかかるんです。つまり、繁殖牝馬というのは、上手くいって年に1頭しか子供を生まなくて、10頭の改良をするためには10頭の繁殖牝馬をいれる。それを10年間フル稼働しても100頭できるかどうかという、軍で必要な馬の数を考えたら、それでは話にならないわけです。ところが、そうなってくると時間もかかるし金もかかる。これをどうするかというので関東軍も苦労するんですね。でも、陸軍は日露戦争後っていうのは金がないんです。むしろ軍縮しようとかいっているぐらいですから、あまりできないんですね。それで関東軍のほうで何とかしたいと考えたときに、ふとひらめいて作ったのが競馬場だったんです。これはそういう資料があるので、事実的にはもう全部こ

の辺りは確定しているんですけど。

それで競馬場を創設しまして、しかもそれは蒙古産牝馬限定という世にも稀な競馬場を作り、その牝馬は関東軍自らが蒙古に出かけて行って優秀な牝馬を買ってきて、購入価格の8割で抽選馬として植民地商人や植民地官僚などに売って馬主になってもらう。そうすると、ものすごくいい馬を買ってきて、しかもその値段の8割で売ってくれるので、ものすごくお買い得なものですから裕福な植民地の官僚とか商人がこぞって買うんです。そうやって売って競馬場を経営する。そうすると馬券の売上が当然あるので、売上の一部は関東軍の独自の財源となるし、その一部は購入代金の差額の2割分の補填に使えるしということですね。しかも、いちばん優秀な牝馬は無条件で関東軍の直営牧場に買い上げるという条件までついているんですよ。これで関東軍は殆ど懐を痛むことなく、経営する直営の牧場に勝ち抜いた優秀な蒙古産の牝馬がずらりと並んでいて、それが改良馬といわれる新しいタイプの蒙古産の馬を次々と生産していくという画期的なことになるんです。

ところが、皮肉にもその頃、輸送の主力が馬から車に変化してしまうんですね。それで、この馬匹改良という意味でいうと、大体この辺りで歴史の使命を終えてしまうんです。

実はこの競馬場というのは外交問題にまでなってます、つまり、満鉄の付属地に作ってしまったものですから、満鉄の付属地に競馬が含まれるのかということで中国側からクレームが来まして、外務省に打診がきて、外務省が大わらわになって動くという何ともいえないことになるんですね。ところが、たまたま上海でイギリスが競馬場を経営していて、それがOKだったものですから、じゃあうちもオーケーだろうということで、この紛争というのは処理されるんです。

この件に関しての外務省での記録というのは、このぐらいの分厚いやつで5ファイルぐらいあるんです。外務省外交文書の中に“競馬”という欄があって、ただ誰も見たことがないらしいです。あそこまで行ってあんなものを見ようというのは、きっと私ぐらいのものでしょう。それで見たら詳しくそういうものが全部書いてあるんです。競馬場の設置から、中身から、外交上のトラブルから、それをどう処理したかまで。まあ、誰も使っていないなら俺がやるかなと思って、いまいろいろとやっているというのが正直なところです。そういうわけで外交的にもちょっと面白い、付属地とは何なのかとか、植民地のあり方を考える上でも1つの材料になるんじゃないかなという気はしています。

やがて満州国ができて、国立奉天競馬場以下9競馬場が満州国に国営でできます。この辺りになると性格が大分変わって、むしろ植民地統治のための1つの手法としての競馬場で、財政的な貢献を満州国に果たしていくという役割になります。人が入らないと話にならないので入場券に宝くじまで付けて、4円で買った入場券で宝くじに当たるといきなり400円もらえとか、それはレベルがいろいろあるんです。それで結構、宝くじ的に買って入って、つられて馬券を買ったりとかいろんな形で、植民地の人やら日本人——大陸で頑張っている人とかからお金を掻き集める恰好の素材になっていくんですね。

実際にいろいろ聞き取りをやりたいなと思って、生徒のおじいちゃんとかで満州にいた人に話を聞いているんですけど、それで話を聞いていると、「植民地は本当に娯楽がなくってな、毎日々々つまらない辛い日々の中で唯一の息抜きは競馬だったんだ」っていうおじいさんがいて、無茶苦茶楽しかったのでその話はよくメモしてありますが、植民地での数少ない娯楽としての競馬場の役割と、社交の場という機能も当然ある。

実はこういうふうなあり方というのは、イギリスが海外で植民地統治をするときに競馬場を必ず作っていった、そういうやり方と非常につながるものがあるんですね。どうもイギリスのケースというのを参考にしているらしいんですが、まだここは確定してません。ですから、いまイギリスの植民地というのは全部競馬場があって、香港にも、シンガポールにも、カナダにもあるし、ニュージーランドにもオーストラリアにも全部ある。そういう植民地統治のあり方という上で、競馬場のあり方というのを満州国では結構、綺麗に類型化されて合うんです。実際のところどうだったのかということに関してはいま調査中で、聞き取りが中心なので、もし皆さまの中にご存じの方、満州にいたという方がいたら、ご紹介願えると助かります。

実は満州国だけではなくて台湾や朝鮮にも同様の競馬場というのが多数設置されてまして、そこに書いてあるように、イギリス型の植民地統治にモデルをとったものだったんだろうというふうに僕は考えています。

この研究をやっていく上での資料は一体どこにあるのかという話なんですけれども、まず軍側の資料というのがやっぱり使えるんですね。言うまでもないなんですけれども、防衛庁防衛研究所に植民地競馬に関する史料というのは結構たくさんあるんですが、一切使われてないので、やろうかなというふうに考えてます。

あとは、先ほど言いました外務省外交資料館の外務省記録の中に“競馬”というファイルがあって、それなんかがまさしくそれでしたね。

あと面白いのでは、おそらくこの研究会で他にこんなことを言う人はいないと思うから言っておきますけど、日本中央競馬会——JRAの図書室というのがあるんです。これは全くの非公開なんですけれども、勝手に学術研究者と名乗って入り込んでいるんですね。この中央競馬会の図書室というのは、旧帝国馬事会時代以来の引継ぎ資料というのが大量に入っていて、戦前の競馬に関係する史料というのが多数あります。

しかし、研究者は誰も見に行っていないんですね。閲覧者の名簿とかを見ていると、井崎脩五郎とかそういう使えないものはいっぱい並んでいるんですけども、まともな研究者は1人も来てないので多分、あまりやっている人はいないんでしょうね。最近、うちの院生でそういうのを勉強しようというやつがいるので、一緒にそいつも連れて行って、いざ日本競馬史学会を作ろうとかいう話をしているんですけども。

**伊藤** 僕のゼミのいちばん古い頃の学生で山本一生という、彼は日本競馬史をやるんだと言って頑張っているそうです。

**山崎** じゃあ、いずれどこかで共通に研究を。

**伊藤** ちくま新書か何かで競馬のことを書いてるけど。

**山崎** 競馬史の研究をされている方というのは大体、日本の競馬場での展開をザッと書いている人というのは多いんです。ところが、それは基本的に『日本競馬史』という中央競馬会編纂のちゃんとした書物があって、史料的にはそこの域を出ないんですよ。

**季武** 競馬史？

**山崎** 『日本競馬史』というのがあるんです。

**季武** 馬正史ではなくて……

**山崎** いや、それはまた別ですよ。『日本馬正史』『日本騎兵史』『日本競馬史』と三種の神器みたいなものがあるんです。その『日本競馬史』が基本的にはいちばんいいんです。新しいだけあって……新しいといっても大分前ですけどね。そこをダイジェスト版的にまとめて新書を書く人っていうのは多いんですけど、それを踏み越えて研究する人は1人しかいないんですよ。富山大に立川という助教授がいて、条約改正・文明開化とからめた競馬の論文をいろいろ書いています。殆どこの人の独壇場で、あの人は当然、日本の第一人者なんで、まあ、とりあえず倒してみようかなというふうなことを考えていますけれども、あの人がやっていないのは、要するに、軍との絡みを追っていない。それと、植民地との関係というのはあまり眼中にないんですね。その辺りをジワジワっと、軍とか外務省とか中央競馬会関係の資料室とかを使って、物証的にもうちょっとレベルの高いものできたらなと考えてます。

**伊藤** 『日本競馬史』はそういうような資料を扱って……

**山崎** 扱ってないですね。抜けてます。特に植民地競馬なんて一言も書いてないですね。だから、日本でのことに関してはかなりいけてるんですよ。ただ、植民地競馬とかは何も触れられてない。全くの空白です。そういう基本文献にさえ空白なので、やり甲斐はあるかなと思うんですけども。

この中央競馬会の図書室のいちばんいいのは、コピーがただなんです。資料をコピーしたいと言うとコピー機を勝手に使わせてくれるんですけども、お金を払うと言っても受け取らなくて、それで「いや、払いますよ」と言ったら、受付のお姉さんがニッコリ笑って「あなた競馬なさるんでしょ」とかって言われたので、「いや、分かりました。じゃあ、コピー撮らせていただきます」って、いままで注ぎ込んだ分はここで私が奪回させていただきますって、既に3000枚以上撮らせていただいております。まあ、全然追いつきませんけれども。

一応この中国側の資料については、来年の留学期間中に2ヵ月間、中国に行く許可をもらってあるので、満州にこもって集中的に見てきてみたいなと考えてます。

その付録が次のページにありまして、千葉県柏市史編纂をいまやっていて間もなく終わりますが、それと競馬場の関係について、もうすでに市史の一部を書きました。市史史

上こんなに競馬に詳しいのは多分、前代未聞といわれる、かなり私の趣味だけで書いてあるものです。ですけど、これはかなり真面目なやつですよ。

柏市には昭和初期に柏競馬場という公営の競馬場があったんです。ところが間もなく廃止されて、いまでいう船橋競馬場に引き継がれた。ですから、船橋競馬場に重賞レースで柏記念というレースがあるんですけど、あれは柏競馬場を記念したものなんですね。

それで、一体なぜ昭和初期に町で競馬場を作ったのか当時の町長の日記から探っているんですが、競馬場を誘致するのに実は多くの町が立候補してまして、かなりの競争になるんですけども、この町長がいろいろと県当局者に根回しをしまして、最終的には誘致競争に勝って競馬場誘致に成功するんです。それでぶち上げたのが、東の宝塚とかいうもので、競馬場を軸に大レジャーランド構想を考えるんです。ゴルフ場、その他も付け加えて、遊園地とか作って、宝塚のようなものを東にも作るという町起こしの構想を立てるんです。なぜかというのは、これは読んでいると分かるんですけども、昭和初期にかなり農村不況で、柏なんていうのは本当に何も無い農村だったものですから、それを打開するための策として、経済効果というものを何とか起こさなければならないという、かなりの使命感から考えたんですね。

実はそれまでの日本の競馬の流れというのは、基本的には軍事目的・馬産目的というのが中心なんです。つまり、競馬場でいちばん優れた馬が父親となり、また優れた子を産みという、そういう能力検定の道具として使われていたんです。

ところが……まあ、こういうことを話はじめると専門的になってしまって申し訳ないんですが、いまでも日本には中央競馬と公営競馬というのがありまして、公営競馬でどんなに名馬といわれた馬でも種牡馬になったりしないんです。どういうことかという、レベル差があるんですね。中央競馬というのは、日本でいちばん優れた馬が集まって、そこで勝ち抜いた馬はみんな種牡馬になり、次の馬を育てていく。まさしく馬産につながるんですね。それが戦前においては軍需につながっていたんだろうと思うんです。ところが、公営競馬というのはむしろ町のレジャーであって、馬産とかそういうものにつながる、むしろ売れ残った馬を引き取るという意味でつながっているのかもしれませんが、競馬場のあり方があまり前向きな形でつながらないんですね。実はそれが出てきたというのは昭和初期の話なんです。

それまでの競馬場というのは少し性格を異にする町起こし型、つまり、人々がたくさん来る、お金を落として行く、飲食業が盛んになる、さらにそこで馬が走ってレジャーになり、馬券の売上があって、その売上の一部が町に入って、それが町の財源として、道路を良くしたり、いい学校を作ったりするのにつながっていくという、そういう町起こし型、レジャー型の競馬場というのがちょこっとできるんですね。ところが、これは間もなく戦局の悪化により不謹慎だということになって廃止されてしまうんです。

そうすると今度、町長はどうするかというと、競馬場が駄目なら次は軍隊を置こうとい



うことで、軍隊の誘致を考えるんです。ちょうど帝都防空が話題になっていたときだったので、近衛の直属である高射砲部隊連隊がやって来まして、柏には競馬場に代わり今度は軍隊がやってくるんですね。軍隊が来れば道路が整備され、町の経済が潤うという、実はこの論理というのは競馬場と全く同じなんです。すなわち、競馬場を作るも、軍隊を呼んでくるも、町長にとっては結局のところ同じだったということがよく分かるということが面白いんですね。

それで日本の競馬の流れというのはどうも、条約改正のための競馬というところから、軍需・馬産目的の競馬というところへ変わっていき、これがいまの中央競馬につながる流れになり、さらに第3の流れとして町起こし型の競馬というのができて、これがいまの公営競馬の源流になっていくという、その第3の流れの原点は、どうも柏競馬場だったんじゃないかなあというようなことを柏市史にちょっと書いたんですね。この際にも、吉田家文書という柏市史の編纂室が持っている町長の日記がメインの資料になって、ある意味でちゃんとした歴史的な研究になったんじゃないかなという気がしています。

ここで何が言いたかったかというと、要するに、資料的なものでいうと、こういう形で最近、市史編纂が進む中で、かなり市史編纂上に、いろいろな形でいろいろ使い道がある資料というのが上がってきているので、こういうものを少し拾うような努力をされないで、市史レベルだとすぐ閉鎖されたりするので、消えないうちに情報を集積しておく必要があるんじゃないかなと思ったんです。

さて、その他のいままで私がやってきた研究で見えてきた史料について話して終わりにしようと思うんですけども、まず、もともと私は何をやっていた人かということ、最近自分でも分からなくなってきたんですけども、「②」の工部省官僚の研究をやっていたはずなんです(笑)。それで、そのときには鹿児島県歴史資料センター黎明館というところにあります中井弘という外交官、工部省官僚の文書を使ってやっていたんですね。これは、いまは目録もできました。ただ当時は、古本市で売られていたのを買われたばかりの史料だったので、史料的な価値が高かったんですけども、最近は結構普通の史料になってきました。

そのあと、その上に書いてあります、公議所・集議院の研究に突如変わりました、こうやって転々としているものですから先生の信頼がなくて、なかなかまとめないやつだというふうに言われ続けているんですけども、こういうものについても追々まとめていきたいなと、そういうふうになら考え続けてもう十年経ったというだけで、いやしかし、これからは考え続けてはいくので、いつかはまとまるでしょう。

それで、公議所・集議院の研究をやって、学会報告までしておいてまとめていない理由というのは、1つに資料が足りないんですね。というのは、公議所・集議院に各藩の代表として集まった公議人の資料というのは、公議人がかなり反政府的な姿勢を示したものですから、政府があまり登用しなかったもので、殆どみんな郷里に帰ってしまっているんです

ね。ですから、資料の多くが地方に埋もれているというところがポイントで、これをたどってあちこち回らないと話にならなくて、回ってもなかなかないんです。それですごく苦労してます。ただ、ここに4つぐらい書いてあるんですけども、実はあと7つぐらい断片は出てきてそろそろ熟してきたので、治水が先ですが、ぼちぼちまとめるかなという気はしてます。

それで代表的なものでいちばん良かったのは、喜連川藩の秋元家という公議人の資料。それから黒羽藩の三田家という、これも同じ公議人です。これはともに栃木県立文書館にありましたので非常に使えました。日記とか記録とか手紙とか、そういうものが山のようにはありました。しかし、これは複写がすごく撮りにくくて、現所蔵者の許可を得なければいけないんですけども、喜連川は地の果てで、取りに行くにしてもなかなか交通もなく、宇都宮からバスで3時間とかかかるんですね。しかし、行って判子をもらってこないと駄目だと言っているし、なかなかたいへんでした。まあ、喜連川は温泉でしたから1泊して楽しかったのも、それは文句を言わないんですけども、そんなようなことでいろいろ面倒なところがあります。

しかし、そうやって在地に眠っている資料というのは、実はまだまだ他にもあるので、これを探っていくってたくさん集めてこなければならぬかなという、もうちょっと形になったらまたご報告申し上げます。

あとは鳥取の沖守固。これは唯一、政府に入った人間です。非常に開明的で、医者の家から藩政へ入った人ですから頭はいいと。ただし、国会の憲政資料室と鳥取県立博物館とに泣き別れに入ってしまった、鳥取県立博物館に行くと、「私たちが先に全容を見ていたのに、国会の憲政の輩がやってきて必要なところを全部持っていった、なんてやつらだ」という話をよく鳥取のほうでされまして、「何とか言っておいてくれ」と私に言われても困るというのが正直なところですけども、そういう不思議な別れ方をしています。こういうものをどう統合して目録を整備していくか、そういう作業は重要なんじゃないでしょうか。さっき言いました愛知県庁文書なんかもそうだと思うんですけども。

**伊藤** 沖も爵位を持っていましたよね。

**山崎** 持っております。

それから、あとは秋元家と三田家ですが、秋元家の文書に基づいて学会報告をしたときに、こんな北関東の弱小藩の研究なんかしても駄目だとか言われたので、頭にきて雄藩の大公議人の資料を探っていたら、越前藩の公議人である毛受洪の資料が出てきましたので、これは福井県立図書館の郷土資料室にコピーが入っていて、原本は実家の毛受家にあるんですけども、それをいまちょっと見ている……

**伊藤** これは“メンジュ”と読むのか。

**山崎** はい。いまでも毛受という姓は福井にあるんですが、松平慶永の側近で、彼の聞番として京都で活躍してた男で、公議政体派から公議所を全力で作るときに監事官として腹

心の人間を送り込んでいるんです。それで、その辺りを軸に他藩の動き、さらに鳥取のように比較的に廢藩論を唱えてきたところ、喜連川のように体制順応しつつも自分たちの位置を考えると、いくつかの視点で公議人の動きを分析できれば、1つ研究になるかなというようなことを考えてはいるんですけども、まだもうちょっと足りないような気がするんですね。

それで、こういう公議人の動きに関しては、前に学会報告のときにも言ったんですけども、千葉の生実藩主の森川家の文書の中にも聞き書きという形で残っているの、意外とこれは各藩の文書を見ていくともうちょっと出てくるかなと。有名なところでは、肥後藩の国事史料か何かにもありますし、あと資料編纂所にあるような聞き書きとかの彼のがありますし、断片を掻き集めて形にしていく地道な作業が必要なんだなというのが正直なところ。まあ、これは、いままでなぜこれを書いてないかという言い訳みたいなものですけどね（笑）。

さて、それから最後の3番ですが、私がいまいる地元、京都の史料情勢なんですけれども、京都府立総合資料館というところがありまして、実際にはここぐらいしかないんです。

ただ、あそこのいいものは、明治元年からの京都府庁文書がほぼ完璧に残っている。しかも京都というのは、横井だの広沢だの政治的な事件が起きるところなので、それに関しては捜査記録なども別件ファイルでちゃんと残ってますから、記録としてはかなり豊富ですね。だから、ああいうものと公文書館辺りの史料と突き合わせながらやれば、それなりに形になるんじゃないかという気がするんですけどね。あと、京都府知事だった北垣国道の日記が全部残ってます。

**伊藤** それは日記だけなんですか。

**山崎** 日記だけです。文書はないですね。

**伊藤** 何でこういうものがあるんだろうなあ。

**山崎** 変なものがときどきフッとありますよ。

**伊藤** これは目録があるんですか。

**山崎** あります。原文書で特にあるんですよ。「えっ、こんなのが」とか、榎村正直関係文書とかも、京都副知事でしたからちょっとあつたりするんです。ただ断片で、あつて7、8点とかです。でも、丹念に見ていくといろいろありますね。京都に来て思いました。

この北垣国道の日記は非常にいいものなので、どこかで出版したいと思っているんですけど、あまりそういう話もないので。

**伊藤** これはどのぐらいの分量なんですか。

**山崎** 結構ありますよ。多分、品川弥二郎文書にしたら2冊分ぐらいまでありますでしょうか。だから、手頃なんですけどね。

**伊藤** 北垣は爵位を持ってませんでしたか。

**山崎** ないですね。まてよ、男爵ぐらいだったらもらうのかな。

**伊藤** 早く終わったから。

**山崎** そうなんですよ、問題はそこなんです。もらったという記憶はないんですけどね。

**伊藤** でも、貴族院議員ではあるな。やってくれば出版するよ。

**山崎** そうですか。じゃあ、考えてみます。

**伊藤** 学生さんにやらせなさいよ。

**山崎** ええ。ここ10年ほど、そうやってあちこち見てきているんですけども、いろんなところを見てきて思うのは、資料があるところには熱意が、熱意のあるところには資料がないというのが正直な感想ですね。

現在、急務なのは、70年代以来の地方史編纂にともない出土した大量の史料群に関する情報をどう整理し、統合していくかではないかという気がしています。さっきから言っているように、意外とそういう町の小さな資料館とかに来ていて、すごくその分野ではいい情報が入るというものがありますので、これをどうつないでいくかが重要なのではないかと考えております。

**伊藤** 非常によかった。この調子で講義をされているんだろうから、学生さんもきっとお喜びだと思います。たいへん楽しませていただいて、いろいろ質問があろうかと思しますので、ご自由にどこからでも。

**勝村** 競馬の話から伺いたいんですが、日本の軍隊と競馬が関係しているということは非常によく分かるんです。それはどこでもそうだと思うんですね。ただ、日本に競馬とか軍隊での騎馬の状態が定着してこなかった理由というのを、いっぺん調べていただければと思うんですね。

たとえば、広辞苑という字引が一般的に日本人の持っている言葉の知識の常識ラインとすると、あの中にホヨウという単語はないんです。ホヨウというのは、犬なり馬なりが歩いているさまを横から眺めるという言葉なんです、それがない。それから速歩——ギャロップですね。そういう馬の速度に関する言葉には3つあって、ウォーク、トロット、キャンター、ギャロップと並ぶんですけども、それに対応する日本語がない。それから、もちろんジョッキーという言葉も広辞苑にはないんです。非常に奇妙に思うかもしれないけど、現実にはない。それで、速歩はなくて早足という言葉はあるんですね。そういうアンバランスがあって、伝統的に古くからある平安時代からくる競べ馬というような形につながってくる用語は広辞苑には生きているけど、競べ馬でない競馬の馬を見ている様子が、近代の軍隊との関係で非常に希薄だと思うということが1点。

それと、イギリスの小説などを読んでみると、よく馬とか犬のことが出てくるんです。それは犬も軍用犬で、つまり、シェパードとかそういうので軍隊と関係するんですが、日本では文学の中においてもそれが非常に少ないと思うんですね。その辺をいっぺん調べていただきたい。

それから情報に関わることでの競馬は、私はかなり収集しております(笑)。というのは、

京都府庁の横に印刷屋さんがあるんです。日本でいちばん古い印刷屋さん。そこで官報を全部印刷するんですけれども、そこで競馬関係のものを全部印刷してたんですね。それから、お経を刷っている印刷屋があって、ここで馬券を刷っていたんです。まあ、お経を刷ってるから悪いことせんやろうというのかどうですか(笑)。それが最近になりまして馬券はみな富士通の明石工場ですべて刷っていて、富士通がJRAの独占企業なんですね。それで、情報の伝達というものが金になるという、この非常にデリケートな環境の中で競馬というのは成り立っているのですが、私も農水省の競馬監督課のほうには、そういう関係でいささか関係しましたので出ていっております。

それからインターネット等々についてのことがあったら、学会をお作りになるそうですから、その節には会員に入れていただきますと(笑)、また役に立つかもしれません。

それと、まあ、あまり言い過ぎるといかなんですが、水に関することでは、同じ京都に住んでおるのですが、巨椋の池の干拓事業についてはまとまっているけれども、あの史料というのは極めていい加減であると思うんです。ですから、これは1度やり直していただかないといけないんじゃないか。それは宇治川発電以来ずっと訴訟続きで、いまの高島屋の飯田さんとか何とか、みんな京都の人が悪いことをしてるわけですよ。それでいっぱい訴訟記録が地裁にございます。開発した人を財界人が乗っ取って自分たちのものにしていく。それが土地とからんでいくという、非常に京都的な争いといいますか、陰湿な争いといいますか、そういう部分があるようですので、綺麗ごとだけがあの分厚い干拓史になっているという印象です。間違っているかどうか……

**山崎** いや、そう思います。

**勝村** それからもう1つは、満州と広東の競馬ですが、その辺の資料も大分持っておりますので、これは私の専門に近いところで(笑)。

**伊藤** ライバル出現じゃないですか(笑)。

**勝村** (笑) いえいえ、ライバルじゃないですよ。私は文献学の世界でございますので。

それからもう1つ競馬で面白いのは、現在のJRAの中の1つで、横浜競馬場史というのは、あの地域との関係においても現在に至るまで非常に面白い問題を抱えていると思うんです。なぜ横浜競馬場だけがJRAの競馬場として認定されていながら馬が走っていないかという、この問題をご研究をいただければなど。

**山崎** 最後に横浜でやったのは、宮崎との関係がありますよね。

**勝村** それから、鹿児島島の樺山さんのところと馬との関係なんていうのは本当に密接な関係で、いまも続いていますよ。だから、鹿児島がなぜ馬産地なのかという問題と近代化の軍隊との関係は、樺山の文書をいっぺんご覧になったらいいと思います。いまでもあそこでは馬を飼ってますよ。まあ、コウイツアンは飼ってないにしろ。

**季武** 僕も将来の日本競馬史学会の会員になりたいと思いますけど(笑)、宮崎には中央競馬が明治の末からあるんですが、その親分をやっていた児玉庵という人の日記があって、

僕はそれを前に1度使って論文を、まあ、競馬の論文じゃないんですけども、書いたことがありますして……

**山崎** あの人は競馬がメインなんですか。

**季武** それで、明治末からかなりレジャー的にやってる感じはしますね。それは、新聞なんかにも出馬表が出てくるんですね。それで、彼はその出馬表を作ったりして随分やっているという感じはしますね。だから、満州なんかにもし新聞でもあれば、かなり分かるでしょうね。

**山崎** そう思っているんです。だから、向こうに行って新聞を見れば大体分かるんじゃないかなと。

**季武** その雰囲気っていうのは分かるね。

だから、関係ないですけど、僕の大学の同僚の人で、JRAからお金をもらって（笑）、蒙古馬の馬具の研究をしている人がいるんですが、どうもあそこがお金を持っているみたいだから、何か上手くだませばいいんじゃない（笑）。

**勝村** 蒙古馬とヨーロッパ馬の違いの研究というのは、非常に面白い研究ができるんですよ。僕はさっきホヨウとか何とか言いましたけどね、中国馬正史の研究なんてあるでしょう。馬正史に最初は興味があったものですから、やっぱり非常に違うんです。ホヨウから何から全然、アラブ産とは違うんですよ。足の長さも違いますしね。ですから、あれは牧畜に適した馬で、小っちゃな競馬場ならよう走るんです。

**山崎** そうですね。先ほどからのお話の中で、軍と競馬の関係というのが出てきたんですけども、広辞苑の中に騎兵関係の用語があまりないとか、軍で主流にならなかったのはなぜなのかという、これは大体何となくイメージとしては掴めているんです。というのは、明治28年に日清戦役が起きるまで、軍は一応、馬匹改良ということをいったり、馬事思想という形で馬に関係するものの知識を人々に広めればということをよく言うんですけど、実際にタッチしないで農商務省とかに任せる。その結果としてその後どうなったか。日清戦争が始まったときに馬が足りないという結論に達するんですね。それで急遽、オーストラリアから馬を1万頭輸入するという計画を立てて、戦争が早めに終わったので結局、500頭輸入したところで終わるんですが、500頭にしてもかなりの金額がかかったんです。それで軍が、これは少し本腰を入れてやらねばというようなことを考えて、日清戦後ぐらいから競馬に介入し始めるんですね。一応、競馬に関しては陸軍省もお金を出して、カップを出したりとかいろんな形で、ないしは騎兵が積極的に騎手となって出て行ってという、いいのかなあというふうに思うんですけども、いいみたいで随分そういうケースがあるんです。

それから、日露戦後の不況の中で軍縮をせねばならなくなって、真っ先に騎兵廃止論というのが随分起きてくるんですね。だから、そうやって見ていくと、非常に財政的な問題もあって軍は競馬との関わりというのを、あるときは持ち、あるときは持たずと。その後、

トラクターの時代になると、もう要らないといって競馬から1回手をひくんですが、トラクターが大陸での作戦行動でよく故障するということが分かってからは、もう1回、大陸での作戦は馬で行かねばならんということを考えてまた競馬に介入しはじめたり、やったりやらなかったりなんです。そのときの情勢、経済情勢、その他、財政状況ともからめあわせながら一貫した対応を取ってないんです。だから、騎兵出身の人があまり上に行かないということと関係があると思うんですけど、日本陸軍の中では歩兵優先主義というか、ああいったものがそういう形で軍の姿勢に影響していたのかなあと。

先生、覚えてらっしゃいますか。昔、先生のゼミで輜重兵の研究をやったことがあるんですが、日露戦争後に初めて輜重兵あがりの人が中將になって、その近代的な科学、軍の科学化をしていくために、那須野ヶ原で大演習をやるという話で……

**伊藤** 演習の話でしょう、覚えてますよ。

**山崎** そのとき以来、すごく輸送とか補給ということに関して関心を持っているんですが、軍はアイデアが少なすぎます。それで、あんまり真剣に考えていないというのが、馬を見てもすぐ分かるんです。これはイギリスなんかとは偉い違いですよ。イギリスなんかは、軍事的なことも含めて、本格的に馬の育成をしますもん。日本になぜ根づかなかったかというのは、ある意味で軍が本腰を入れなかったからじゃないかという気がしてるんです。

**勝村** 司馬遼太郎が『坂の上の雲』でそのことは書いてますね。くどいくらい書いてる。

**山崎** ええ。でも、そういうことはある程度、いままでの日本競馬史なんかでも多少分かることではあるので、そういうものも踏まえつつ、軍と競馬の関わりについてはもうちょっと煮詰めていきたいなと思います。

**伊藤** 地方の文書館とか編纂室などは飛び込みですか。

**山崎** もう全部飛び込みです。何か話をフラッと聞いてということはあるんですけど、そういう情報は、たとえば、ロコミですよ。私がこんなものやってますみたいな話をしたときに、あそこにあるんじゃないかとかと言われて行ってみるとか。でも、基本的には大体川の流れているところなので、調べればすぐ分かるし、そもそも明治期のはじめだと14大川といって14しかないんだから、その沿岸を当たっていけばというふうにあたりがつくじゃないですか。それで行っているうちに、たとえば、福岡の場合だったら、県立図書館のほうに聞いたら小郡にあるよと言われて、それで紹介してもらってという形でした。

**伊藤** こういうことを言っでは申し訳ないけど、せっかくこれだけいろんなことをやっていて、断片的な報告もあまり出てないというのはやっぱり、ちょっと具合が悪いんじゃないかなという気がするんですけどね。もうちょっと資料が足りないとか言わないで、ある資料で現在の段階でどういうことが言えるかというふうにお考えいただけると、たいへんありがたい。

**山崎** 分かりました。ちなみに、この1枚目に書いてるやつは、このままの構成で博論に

しますから、来年のサバティカルの間に全部書きますので、帰国後……

**伊藤** いつも予定は聞くんですけど（笑）。

**山崎** これは言い訳になるんですけど、大学が忙しいんですよ。今度は1年休みをもらえるので（笑）、ここでやらなかったら多分、僕も次のサバティカルまで書き終わらないぐらい忙しいので、そこは学者生命をかけて。

**伊藤** （笑）大丈夫かな、あんなこと言っちゃって。

**山崎** いや、正直言って一生懸命やろうとは思っているし、その条件が整うときにやっておかないと多分、二度と今後できないような気がするので、頑張りたい、頑張るつもりです。

**伊藤** （笑）ぜひ。

**山崎** 実は断片は書いているんですよ。

**伊藤** 書いているのは分かっているんですよ、ときどき間欠的に出てくるから。

**山崎** そうなんですよ。何か体系的に……

**伊藤** いや、体系的でなくてもいいんですよ。

**山崎** 村瀬さんは将来の日本競馬学会の最有力の会員としてマークしておりますので。

**伊藤** あなたが掲げた資料で目録のあるものはきっと少ないんでしょうね。

**山崎** 少ないですね。私は目録というか自分に関係するところだけとって、先生が目録があったらくれと言ったんですけど、目録がないのと、僕が作ったメモがあるんだけど、そんなの持ってきてもしようがないような気がしたので。

**伊藤** しようがなくはないよ。

**山崎** この資料とこの資料だけというふうに走り書きで書いているだけなので、ちゃんとお見せできるようなものはないんですよ。

**伊藤** それでいいんですよ。

**山崎** 念のために言うと、一昨日、一昨々日辺りはずっと探してたんですよ。

**勝村** 毛受さんというのは、その子孫とか何か分かりますか。

**山崎** その毛受家文書は毛受家から出てきたらしいので、それを逆にたどればいらっしゃるんでしょうけど。

**勝村** 京大の土木の卒業生で、いま道路公団の偉いさんになっている人で毛受という人はいますよ。

**山崎** その方ですかね。

**勝村** 知らないけど、毛受という名前が珍しいから。

**山崎** 意外と毛受という姓の人はいるんですよ。最近、私は毛受という人に会いましたし、東大の国史に毛受というのがいたんですよ。それで「これ“メンジュ”って読む？」って聞いたら、「そうなんです、よく読めますね」って言われたから、「福井？」って言ったら、「福井です」と。それでこの家かどうか聞いたら、その家ではないということですので、



何か福井のほうに行くというみたいです。だから、1回あたってみます。でも、この川が終わってからですよ。いまは全ての力をこっちに注いでいるんで。馬にも3割ぐらい注いでますけど（笑）。とりあえず、7割はこっちへ行ってますので。

**古川** さっき柏の話が出てたんですが、柏市史って昔、アルバイトか何かで関わっていらしたので……

**山崎** ええ。まだ一貫して関わってます。

**古川** それで、この町長さんの日記っていうのは、市史の資料編とか何かに入る予定はないんですか。

**山崎** 入る予定はありません。というか、資料編を出したいと言ったら、行政側から資料編など要らんと言われて、とりあえず本文だけ早く作って解散してくれということでしたから。

**古川** これは返しちゃうんですか。

**山崎** もうすでにマイクロしかなくて、原本は吉田家に返しました。でも一応、マイクロに焼き付けから筆写して起こした、その大量の起こしを上山先生の関係で国学の院生が来てやってくれたので、そのコピーは全部来ました。これはいい資料なんですよ。本当は資料編にぜひ入れたいんですけど。

**古川** 何年から何年ぐらいまであるんですか。

**山崎** 大正の頭くらいから昭和の初期ですね。大体、昭和15、6年ぐらいまでです。

**古川** それじゃあ、初期じゃないじゃん。

**山崎** 私のイメージでは、昭和が60年間ぐらいあるので初期なんですよ（笑）。済みません。

ただ、軍の誘致の話は栗田さんがお書きになるので、私は一応、競馬のほうで切ってるんです。だから、それに栗田さんの話を少し取り込みつつきょうの話はまとめてあるので、後半の特許は栗田さんのものみたいな。ただ、論理的には同じだということは、僕のほうからも分かるなというだけです。ですから、もし見るんでしたら、マイクロはあるので簡単に見られます。だから、軍と党派の問題とからめて動員とか軍とかをやる方には、たまらない資料のうちの1つなんじゃないでしょうか。私はあまりそういう方面は関心がないので。

**古川** どうもありがとうございました。

**伊藤** こういう細かい情報もなるべく拾ってホームページに入れてください。

**梶田** 分かりました。

競馬の話ですけど、うちの仕事のからみで申し訳ないんですけど、明治の文明開化云々の頃は、天皇は軍隊と関わっている感じがするんですけど、軍が云々というときにはどうなんですか。

**山崎** 皇室は一貫して関わってますね。しかし、関わり方に随分、時期によって温度差が

あります。いちばん熱意を入れていたのは、やはり条約改正の頃です。あの頃、皇室というか公家とかを含めたあの辺りの日本のトップクラスの男やら女やらが、競馬場に行って華やかに盛り上げる時期というのがあります。鹿鳴館的ですけどね。その頃は随分、皇室からも帝室御賞典が出たり——いまの天皇賞につながるものですけど、楯が出たり何とか杯が出たりとか、華族の女性たちがお金を出し合って作ったトロフィーみたいなものが出されて、三条の夫人か何かがカップを優勝した騎手に贈呈するとか、そんな華やかなのがいっぱいありますよ。あの頃は、皇室のあり方というか、そういうものとタイアップさせて高尚な競馬場を作ろうというような発想があったんでしょうけど、それは条約改正で終わります。だから、どちらかというとなら10年代から20年代の頭ぐらいですね。日清戦争前後から、そんな生温いのはどんどん捨てて、むしろ実質的な軍部とかが出てくるという感じがします。それでも一貫して帝室御賞典というのは出ているし、千葉にかなり広大な御料牧場があって、あそこで飼ってる種牡馬とかが日本の馬産のリーダーになっていくんです。やっぱり御料牧場がいちばんいいんですよ。

**梶田** 御料牧場は軍とつながっていくんですか。

**山崎** それが、直接には結びついてくる部分と結びついてこない部分があって、御料牧場は基本的にはずっと御料牧場で行くんですけれども、あるときちょっと払下げをしたりするんです。そういうときに軍が入り込んで牧場経営に多少関わっていったりするんですね。

ただ、どうしても軍は直接には馬の経営というのはやらない。軍が牧場を経営するのは本筋ではないみたいで、軍はあくまで民間の牧場で作った馬を買うというのが基本なんです。ですから、軍馬補充部があって、軍が生産地でいちばん優秀な馬を買ってくる。軍だと高く買われるし即金で払ってくれるからというので、馬産側からするとお得意様的な感覚なんです。ただし、軍としては優秀な馬が欲しいから、種牡馬の導入とか、ないしは競馬振興に力を入れたりという形で助力はするんだけど、軍が馬産の主役になるということはありません。だから、そういう意味でいえば関東軍のケースは珍しいんですよ。

ですから、軍と天皇家と競馬、農商務省との関係というのは、いままでの研究でもきちっとした見取図はないんじゃないですか。それもちゃんと解明しつつ、それぞれ見通しをつけていくというのが今後の研究の発展につながるのではないかとんじゃないかと考えているんですけど。

**勝村** 競馬は戦争中までやってますね。それも皇室と関わって、天皇賞や菊花賞なんかは戦争中もずっとやってましたね。お客さんはいなくて、競馬関係者だけで競馬場でやり取りしている。もちろん馬券は売っていないと。

**山崎** 競馬というのではなくて、能力検定競争という名前になってますね。

**勝村** ええ。馬事会主催とか、馬主会主催とかね。

それと、軍が関わらないけど、在郷軍人なんかはやはり馬産と関係していきますよね。

それは結構あるんじゃないですか。

**伊藤** 競馬ということとは直接関わらないけれども、かなりあとまで軍人さんや偉いさまたちが乗馬で役所に乗り付けたりとか、そういうことはあったと思いますし、それから馬車が一時期かなりあるでしょう。要するに、乗る馬車ですよ。まあ、それは車が入ってくるとすぐなくなるわけですけどね。馬小屋がすぐ車庫になるという格好でしょうけど。

**山崎** 軍人が馬に乗るのを廃止しようというのが大正期ですかね。

**伊藤** 馬に蹴られるってんだらう。

**山崎** 財政上無駄だから乗らなくていいということで、自主的に廃止させようという資料が防衛庁の文献の中にありましたよ。だから、乗馬としての意味もだんだん減るんですよ。やっぱり軍との関係は一貫してないんですよ。

**梶田** 軍が出張に使う馬と競馬で走らせる馬は同じなんですか。

**山崎** そこは違うんですよ。輸送馬としてはいまのサラブレッドみたいなのは使いものにならないんです。足をすぐ折りますしね。だから、スピードを優先するような競馬にすると駄目で、スタミナを競うような競馬にしないと話にならないんですけれども、これは馬の種類とかを全部言わないといけなくなってくるので、それは言えるんですけど、でもちよっと（笑）。

**梶田** たとえば、いまでも金曜日なんかには、練習用の馬車をひいて皇居の中で練習しているんですね。あれはどういう馬なんですか。

**山崎** いまの皇居ですか。それは皇居馬を見たことがないので（笑）。ただ、平安騎馬隊とかで走った葵祭りとかで出てくるのは、あれはサラブレッドからの転用なんじゃないですか。あれは確か、トロットもいくつかいるみたいですけどね。

**勝村** そうですよ。それで、1分間に210メートルというのが決まっているんですよ。それですと行く。ただそれだけの速度という馬だから、それさえ満足しておれば馬の種類はあまり問うてないんだらうけど、皇居にいるのはサラブレッドですよ。

**山崎** 皇居は知りませんが、平安騎馬隊はサラブレッドですね。

**伊藤** 輓馬競技なんていうのは、あれはまた全然違う馬でしょう。

**山崎** あれは重種っていうんですよ。フランスからイレネーという重種の馬が入ってきて、その種牡馬が200頭できて、そこから広がっていくペルシャ湾系という系統があって、あとグルカン系という系統があるんですが、この2つが主流なんですね。北海道とかだけがメインで、あまり本土ではありませんね。これはスピードが全くないんです。挽曳の競馬っていうのは、1回見たことがある人には分かるんですけども、馬が歩くんです。それで、200メートルの間に2度山があって、それを越えて行くんですが、何分もかかるんですね。もう走るじゃなく、曳くとか歩くとか。ただ不思議なもので、ああいう競馬でもちゃんと追い込み馬とか逃げ馬とかがいて、追い込み馬というのは、最後の坂をいちばん最後に越えてからたゆまなく歩んで来るんですよ。他の馬が前のほうで疲れて止まったりして

いる間にノシノシと抜いて行くという、そういう追い込み馬なんです。なんとも言えない面白い競馬です。

でも、それと大陸での作戦行動というのは、はっきり言って関係ないですね。むしろ軽種と重種の間種なんです。それで、蒙古産は軽種に近いんですが、蒙古産の馬がいちばん大陸には合うみたいで、ものを曳かせたりするとものすごい粘り強いんです。それで長距離移動にも耐えられるし、重みにも耐えられるんです。だから、蒙古産の馬がいいという結論に達するまでにすごい時間がかかる。戦争を経るまで分からない。

それでどうしたかという、初期はアラブがいいんじゃないかと思って、アラブ馬とかを大量に買ってくるんです。それでアラブの血を入れたり、オーストラリアの馬がいいと言われて、オーストラリアから馬を買ってきて入れたり、そういうやり方をするんです。最初は日本の伝統種にアラブを入れていくという感じで馬の生産が始まるんですが、それではどうもよくないということが分かってくる、小岩井が中心になってオーストラリア産の馬を入れたところから系統がすごく変わってきて、それが今度、大陸での作戦行動になると実はそれでも駄目だということになって、そこで蒙古産の馬が出てきて、関東軍の競馬場ができてくるという、そういう流れがあるんです。

**櫻井** 馬車鉄道ってありますよね。あの馬は？

**山崎** 済みません、今度調べておきます。

**勝村** 対馬の馬も案外力が強いんですよ。50キロの荷物をいまでも背負って山まで上がってるからね。日本馬の研究はまだまだやらないと。

**山崎** そうですね。去年、対馬で対馬馬の牧場を見てきましたけど、やっぱり体が小さいですよ。

**勝村** 小さい、小さい。

**山崎** 在来種はうちの田舎の木曾駒なんかとすごく似てますね。

**勝村** そうですね、木曾駒と似てます。

**山崎** あの体型ではさすがに、大陸で毎日というときついででしょうね。

**伊藤** 資料の話より馬の話になってきたな（笑）。

**山崎** 壱岐対馬対馬に行ったときに、宗家の文書は結構ありましたね。

**古川** うっかりしてあまりの滑らかな口ぶりで聞き落としたかもしれないんですが、古市公威の文庫というのは、個人的な日記とかメモとか書簡とか、そんなものは入っているんでしょうか。

**山崎** 日記はないです。メモとかの類で言うと、留学中に書いたメモは大量にありますね。ただ、全部フランス語なんです。それで仕方がないので、東大の西洋史——フランス史に僕のサークルの後輩から研究者で残っている女の子が院生でいたので、その子をアルバイトで3日間雇って、主要な要点だけを読ませてメモを取ったという、そのメモはありますけれども（笑）、それは他の方に使えるようなものではないような気がするんです。まあ、

フランス語をお読みになれるんでしたら、そのフランス語のメモなんかは結構、留学中の記録としては面白いですね。

あと書簡の類では、書簡という形では入ってないんですけども、伝記資料を編纂したときの資料として綴じてある中に、書簡をどうも原稿用紙とかに筆写したようなものとかは入ってます。だから、そういう形で使わせていただけてますけど、ひょっとしたら原本は古市家にまだあるのかもしれませんがね。それはあたったことがないし、どうやってあたっていいのかもよく分からないところがあるので。

**古川** 明治とは関係ないけど、昭和だと宮本武之輔っていう人がいて、あの人の日記だと、僕は企画院のことで作ったけど、それを見ると内務省時代にあちこちに工事で行っているときの日記が全部あって、いろんな地元との付き合い方みたいなのもあるんですが、明治期は内務省側の技師さんとかそういう資料はあまりないのかなあと。

あと、古市という人はとにかく有名な、僕の学校の話もちょうと出てくるし、いろんなところに出てくる人なのでちょっと聞いたんですけど。

**山崎** そこはむしろ在地のほうにありますね。つまり、市町村長まで行かなくても、村長ぐらいの記録とかを見ていると、中央から技師がやってきて接待し、そのうち一緒に巡視しながら何を見たとか。新聞なんかにも結構、そういう記録が載りますよね。中央から技師が来ると、特に水害直後なんて敏感ですから、『何々技師来る』っていう感じで、それでどういうふうにしていくかみたいな話は。私はそれで拾ってるんですよ。

それで、行った側の記録で残っているのは、はっきり言って見たことないです。それはあれば見たいんですけど、技術者の資料って残りにくいですね。古市ぐらい有名になればこんなものも残るけれども、案外ない。むしろ見つけたら教えてください。どこかで見たことありませんか。本当に欲しいんですよ。ただ、迎えた側の資料で大体の状況は分かるので、それでよしとしているところが僕にも多くて。

**伊藤** この治水会というものは、現在まで続いているんですか。

**山崎** 全く続いてません。これは要するに、一種の院内会派とっては変なんですけれども、代議士による党派を越えた治水に関してのみの運動体なんです。常時これは議会に備えて動いているんですよ。事務局もあって、議会前にちゃんと会合をやっているんですけども、治水会そのものが明治29年の河川法が制定された段階で、とりあえず初期の目的は達して活動を停止してます。

**伊藤** しかし、何か河川に関する協会はあるわけでしょう。

**山崎** それはあります。治水協会という全国組織があって、それがしばらくの間続くんですけども、これは学識者とか学術交流団体的な感じで治水問題を研究する団体なんです。それと院内でやっている治水会があって、あと大日本治水連合会みたいな名前だったかな、ちょっと正確には知らないですけども、これも資料によって名前が違うんですよ。ただ、実体は同じなんですけれども。要するに、各水害地の復建とか、地元の有力者が出てきて

東京で議会に合わせて会合をやるんですね。それをまとめたような団体があるんですよ。その辺りはどうも三位一体となって動いていたみたいなどころがあって……

**伊藤** そういうのは多分、機関紙か何か出してたんじゃない。

**山崎** 出してるんですよ。治水協会雑誌というのがあるので、それで一通りの動きは追えるんです。

**伊藤** それはいままで続いてないの。

**山崎** 全然続いてないです。明治29年の河川法制定で一気に熱は冷めるんですよ。ここで制定された19河川に関しては、活動を停止してしまうんです。もちろんそれは個々の代議士レベルがあるんですよ。ただ、横に連動体制を組む必要がなくなるんです。つまり、治水会ができたときには、うちの川が乗り遅れたら困るという理由で、ものすごく多くの川の沿線の連中というのが参加したんです。たとえば、青森とか。ところが、青森の岩木川とかは、このときの河川法の対象から外れるんです。そうなると、岩木川の沿線の連中はまだ運動を続けたいんだけど、すでに達成されてしまった利根川のほうはもういいやという話になる。しかも、もともと大河川の中樞だった人間が治水会の中樞でしたから、彼らは止めてしまうんです。

そのため、どうやってあとは河川法に基づいて各地元の工事を中央と折衝しながら進めていくかというレベルになって、横での連帯で中央に働きかけるような形ではなくなるんですね。それとともに、まだこの明治20年代には、技術的なものは中央に全部頼ってて、それを地方が口を出すことを考えるというのはめったになくて、そのために中央があとはやっていくということになると、技術的な研究すらもやる必要がないという話になって、治水協会そのものは終焉してしまうんです。現に資料はそれからあと何も残ってないんです。

それがもう1度再燃してくるのは、明治43年水害で各地方地方の個別の動きになって、全体的なそれを統合するものとしてはなくなると。

**伊藤** しかし、治水問題っていうのは今日まであるわけだから、今日だって協会か財団法人か何かあるんだろう。

**山崎** ありますよね。

**勝村** 砂防会館というのがあるな。

**山崎** (笑) そうですね。でも、この辺りからはつながってないですよ。だって、湯本とか見れば分かりますけど、盛り上がって切れ、盛り上がって切れということですから。

**伊藤** 土木はあるだろう。

**山崎** それは学会としてはありますが……

**伊藤** あれは学会だけか。

**山崎** ええ。古市公威が中心になって作った土木学会があるんですけど。ただ、いまはその土木学会系が情報の収集もやって、土木学会史を出して土木学会図書室を運営している

という流れはあるんですけど、それは古市から始まる1つの流れで、この治水会から土木会、臨時治水調査会と続く一連の政府・民間の流れというのは、ストレートにはつながってないんです。ただ人脈的には、全部に湯本が絡んでるように何らかのつながりはあって……。まあ、臨時治水調査会が減んだあとは、あまり動きがなくなるんです。むしろ、そのあとは御厨さんのほうが詳しいから。本当につながってるものはないです。(笑)だって、そこは調べましたもの。しいていえば、土木学会という形で人のつながりはあります。何かそういうものを流期的につなげるような運動体というのではないんですよ。

**伊藤** しかし、役所に管轄するところがあれば、必ず協会があるよな。だから、河川局があれば、河川協会はあると。

**山崎** そうですね。いや、でもこの段階ではないですよ。本当にはないんですって(笑)。さすがに、あれば拾いますよ。

**伊藤** 土木局があれば土木協会はあると(笑)。

**山崎** 分かりました。調べますよ。

**小宮** 湯本の資料は、随分前から埼玉県立文書館に入ってたんですか。

**山崎** 私が初めて見たのは助手時代でしたから、5年前ですかね。5年前に移ったんですよ。

**小宮** それまでは？

**山崎** それまでは湯本家にあっただです。随分前じゃないですね。だから、4年前か5年前、僕がこの研究を始めたときはまだ湯本家にあっ、そのあと湯本のおじいちゃんから移したよっていう話があって、それで埼玉のほうに聞いたら、来たけどまだ整理も何もと言ってたのが5年前です。それで、3年前にちょっと行ったときには、とりあえず段ボールからは出て、それぞれ封筒に分かれて入って、カードが一部できていて、去年行った段階では、カード撮りは一通り、ペリペリのやつ以外は全部できて、まだ団塊になっているやつがちょっとあって、でも目録はできてないという状況でした。

**小宮** 埼玉県とかは結構、文書館とか博物館とかいろいろ盛んだと思うんですけど、目録みたいなものを見ても殆ど個人文書みたいなのは入ってませんよね。あっても近世が中心で、あとは近代がチョボチョボみたいな感じなんですけど、そういうのはいままで史料を整理してきた側に問題があるというか、近代史といってもせいぜい自由民権ぐらいまでしか関心がないような人たちがやっていて、たとえば、湯本にしろ結局は国民協会系ということで、その人たちの発想として探そうという関心すらなかったという状況なんですかね。

**山崎** それは、史学研究の大家がそちらにおられますので、村瀬先生にお聞きしたほうが良いような気がするんですけども。

**村瀬** 僕は大家じゃないよ、“オオヤ”程度だよ(笑)。

だけど、僕が埼玉と関わりをもったのは昭和50年代だけ、そのときはまだ文書館そのものはなかった。昭和58年ぐらいでね。大体、湯本に遺族がいるのかどうかも、所在がつか

かめてなかったんじゃないかな。湯本っていうのは、北方の大地主の家——田島家から養子に来た。

**山崎** そうですね。

**村瀬** その田島家も零落しちゃったでしょう。

**山崎** 念のためにいうと、湯本家も湯本義憲がつぶしたって言われているんですよ。

**伊藤** 井戸堀か。

**山崎** 典型的な井戸堀です。遺族は、先祖としては無茶苦茶嫌っているらしいですよ。

だから、湯本の件で私はすごく思ったんですけど、代議士の資料の発掘は遅れてますよね。それが多分、何となく政党史研究の遅れを招いている部分っていうのはあるんじゃないですか。

**伊藤** それはありますよ。

**山崎** 特に吏党系に関してはすごくそう思いますね。

**有馬** いや、同じでしょう。吏党系だけではなくて、小宮君が言った事情っておそらくあるんですよ。だから、案外信用できないのは、県立図書館に行くと、文化庁が金を出して古文書の研究調査なんていうのをやったときの報告書の目録があるんですね。これは基本的には近代史の研究者が参加してない場合が多いんですけども、見ていると『明治期あり』とかね（笑）、『あり』で終わりですから。そういう状況のままで、その後、追加調査をやっていない。だから、部分的に僕らも少し潰してますけれども、『若干あり』と書いてあるので行ったら山のようにあったとかいう話はいくらでもあるんですね。

それは、1つには地域の史料調査そのものに近代史の研究者があまり関わらなかったということと、関わっても自由民権運動までしかやらないというタイプの人が関わっている。たとえば、その地域の衆議院議員なり、あるいは県会議員を全部リストアップして、それをしっかり調査をやっていく、網羅的に潰していくというようなタイプの、それこそ伊藤さんのところとか、あるいは一時期の憲政資料室がやっていたようなタイプの調査を、いわゆる政治家についてやっていないケースは非常に多いんですね。だから、そういう事情っていうのは大きいと思いますよね。

**季武** ただ、いまこれもお金でやっているんですけども、埼玉県と神奈川県に関しては人を1人つけて、そこにある近世からついでるような個人別の文書の目録を作ってホームページにも載せているんですけども、それを見ても随分、改善されているなという気はするんですよ。

**有馬** 少しずつ変わってきてますね。

**季武** それで、以前に比べるとかなり我々にも使えるようにはなってきていると。ですので、今後どうしたらいいものか、それを続けていくのがいいのか（笑）。

**有馬** それは難しいですけどね。だから、自治体史の編纂そのものはそういう意味ではかなり大きくて、これは典型的なんですけど、さっきの佐々木正三文書ですけど、小郡市



なんていうのは、要するに、適当に作った市ですから（笑）、古い考古学的な出土品とかそういうのは出ているわけなんだけれども、小郡市というくくりはあまり意味ないですから、そうすると自治体史の編纂を始めたときに、何を書こうか、何の資料があるかという、何もないわけです（笑）。何もないところでやると、ともかく何でもかんでも集めようとするわけだから、引っ掛かったものはそれなりにきちんと押さえられるというところがあるんです。佐々木正三の出方を聞いたら、家を壊したときにこれだけ出てきたと言ったのかな。備忘録だけで他の文書は何もないんです。ともかくそういう形で何でも集めなきゃいけないわけですから、こういところに出てくることはあるんですね。

**伊藤** 地方のそういう史料収集をやっているところとある程度連携しながら、しかし、全体として高質の史料を集めなければならないので、リストアップはきちんとやって、遺族を調べてという、系統的な史料収集はやっぱり必要だと。それをやるところがいまないわけですね。憲政資料室がいま殆ど開店休業だから。そういうものに将来、この研究会を発展させていきたいというのが狙いですけどね。

いまホームページが、クリックしてもあまり出てこないということなので、少しこの夏休みに季武君辺りに協力してもらって概要を入れる。その概要のところには、どの部分が活字になっているかということも、あるいは活字になったものだけあって、原文書はどこにあるのかいま分からないというようなものもあると思いますので、活字になっている部分からのアプローチもきちんとやったほうがいいのではないかなと思っています。

**有馬** それは大きいんですね。従来の調査っていうのは、目録は作るんだけど、概要を書くという習慣がないんですよ。だから、非常に検討がつきにくいですね。こんな厚いやつを端からめくって行って、1個々々見て行って何かあったという形でしか検討がつけられない。

**伊藤** 概要は少しいい加減でもいいから、作ったほうがいいんじゃないかなと思っていますんですけども。

**季武** いま作っているのは、所蔵家とか所蔵者の簡単な略歴と、その文書概要というのはやっているんですけどね。

**伊藤** だけど、ある程度の部分、活字になっている史料はたくさんあるわけでしょう。そういうものを、こういうものがあるぞというのをそこに情報として入れこんでおかないと。

それから、府県史の史料編ですが、各府県史なんかはかなり史料編を充実させているし、最近、近代の史料が随分増えているんですね。ただ、表題だけ見ていると、史料編近代1とか2とかで、中を開けて見ると突然、誰かの日記が復刻されたりしていて、分からないんですね。これもきちんと調査をしなければと思ってるんです。

**山崎** 首都圏なんかは結構、地方の資料館の情報を集積してますよ。首都圏憲政史研究会というミニ学会をやっているんですけど、あそこは各首都圏の資料館とか文書館の学芸

員がみんな集まってるんですね。それに地域的な研究をしている人がみんな集まって、一緒にいろんな地域の問題をやっているの、史料情報とかは横で連絡が流れますから。

**伊藤** そのネットワークはホームページか何か持っているんですか。

**山崎** 持ってません。ただ、首都圏憲政史研究会会報というのは出して、そこに情報ネットワークという形で史料情報を寄せたりとか、内部ではいろいろやってます。

それから岐阜なんかだったら、地元の歴史資料を復刻したり熱心にやっているグループがあるじゃないですか。ああいうのも上手く情報として使えると。

**伊藤** インターネットでつなげるところがないんですね。

しかし、思いがけないところにいろんな史料があるものですね。建設省の淀川資料館なんていうのはびっくりしましたが、各省庁はあちこちにそういうものを持っているかもしれないですね。こういうのは建設省のホームページに入っていけば出てくるかな。

**山崎** そんなものないでしょう。要するに、淀川工事事務所が持っていた文書が行く場をなくして、治水が終わって間に詰め込んだだけでしょう。資料館っていう看板を付けているだけです。念のために言うと、ここは立派じゃないですよ。みくに龍翔館なんかは格好いいんですけどね。あそこは観光地としていいぐらいの場所です。

最近分かったのは、70年代に地方史編纂したところは駄目ですね。考え方が古い。近代とかを軽視してる。でも、このみくに龍翔館がいいのは、いま三国町史とかいう形で地方史編纂をやっているの、そういう過程ではちゃんと近代とかを入れてます。だから、この龍翔館の史料がいいんですよ。若手の学芸員が1人いますね。とりあえず調べるんだったら、ターゲットとしてはやはり、90年代に地方史を編纂しているところから前に戻っていくほうが効率的だと思いますよ。

**小宮** やっぱそれは、ちょっと個人的な意見で申し訳ないですけど、大学の近代史の教員でも、戦後すぐとかにできたところは、近世後期とかをやっていた人がそのまま近代史の講座を担当したりとか、そういう形で講座を持ったりとかすると発想としてはやはり、帝国議会開設からは相当新しいというような感覚で、たとえば、神奈川で大西比呂志さんとか、あるいは政治学者で昭和史とかああいうのをやっているような人たちが、自治体史とかに関わり出してくるのは、全体的にいうといつぐらいなのか気になっているんです。

**伊藤** せいぜいここ10年ぐらいじゃないですか。

**山崎** 藩がつぶれて県ができれば終わるという、そういう発想のもとで育つとそうなるのかもしれないね。

**矢野** 個人的に非常に面白いことを聞かせていただいたんですが、さっき小宮君が言ったことかというと、僕は東京のいわゆる市部の自治体史、それから埼玉のほうの自治体史を経験して、絶望感と怒りといろんなことを経験したんですけども、ただやっぱり、最初に立ち上げるときの組織の作り方と、誰がトップに来るか。あとは、地元の人はどうしてもしがらみがあるんですね。それは嫌というほど経験したんですけども、外から入っ

てきて、こういうところをちょっとやってくれと言うと、地元の先生なんかも、あそこの家は狙っていたけどいままで手を出せなかったと。ただ、外部の人が行くと意外と蔵の中とかを見せたりしてくれると。

**山崎** それをやって千葉の野田市史がこじれたんじゃないですか。野田市史がやろうとしていたところにオーバーラップして千葉県史がやってきて、その史料はどっちのだというようなことで。

**矢野** あともう1つは、史料の調査の主体は近世になっちゃうんですね。だから、どうしても近世と近代が分離して、近世で入って近代のほうは大体残しちゃうんです。それで新たに近代のほうが入ろうと思うと、もうそれは入れない状態というのができてしまって、実は史料はあるんだけど近代は残ってしまうという調査の不手際。だから、近世も近代も一緒に入って全部持って来るというやり方ではなくて、近世は近世、近代は近代みたいになるから駄目なんですよ。

**山崎** そうそう、そういうことは結構いままで多かった。

**矢野** だから、手つかずの部分がたくさんありますよ。蔵を見せてもらおうと、それこそ戦前の明治・大正から、戦後の自民党何とか支部の何とかという箱が焼けないで残っている家が板橋にありましたよ。もと教育長なんていうので行ったら、すごい剣幕で「やることがまだあるんだ！」って言われて、役所の人たちもみんな恐縮しちゃって、僕が1人でそのおじいさんを突っついたんです。そしたら、もう駄目だろうから帰ろうかなと思ったら、「じゃあ、蔵の中だけでも見ていくか」って。家の中に蔵があって、外にも蔵がある。そしたらごっそりありまして、その箱の1つに自民党板橋何とか支部関係書類とかね、結局つながっているんですよ。

ちなみに、荒川は全然出てこなかったんですけれども、荒川についてはないんですか。

**山崎** 荒川は水害がないんですよ。

**矢野** そんなことはないと思いますよ（笑）。

**山崎** それは明治43年まではないという意味ですよ。明治29年災害水害とか、明治25年水害とか、あの辺りに荒川は氾濫してない。基本的には利根川なんです。ただし、明治43年水害では、荒川も初めて大水害があるんです。だから、43年水害が面白いのは、それまで関東で治水といえば利根川の中下流が中心で、極端に言うと、やっていたのは埼玉と千葉だけだったんです。ところが、あのときは首都圏全域で大雨になって、多摩川と荒川と、それから茨城のほうの川から何から利根の上流も含めて全部やられたんです。それから初めて群馬とか茨城とか神奈川とか、それまで眼中になかったようなところの連中が全部あげて運動に参加してきて、初めてそういう意味では首都圏に共通した政治の運動体制ができるんです。それがひょっとしたら、首都圏というものの政治的な連合の始まりなのかなと。

**矢野** 僕が板橋で見ていたのは大正期なんですけど。

**山崎** 大正期はむしろ、落ち穂拾いになるんですよ。つまり、明治20年代というのは、対象としている川は14しかなくて、そこには荒川とか多摩川は入らないんです。それで、43年のときの臨時治水調査会で決められたやつでようやく65河川になって、そのときに初めて多摩川とか荒川とか相模川が入ってくると。

**矢野** だから、見てるとね、板橋なんかも荒川がかすめるんだけれども、あそこの、いわゆる政友会の大ボスで「ハナイゲンベエ」というのがいて、伝記を見ていると治水のことでどれだけ苦労したかが延々と書いてあって、治水とか水利で問題が大きかったのはそれを見てたんです。それでハナイゲンベエの家を調査したんだけど、史料はもうなくなっちゃいましたという返事で、ちょっと惜しかったなと思ったんですね。

**山崎** うちの亡くなったほうの祖父が越谷の村長で、荒川治水を全力でやって、うちのじいさんを讃える碑がたってるんです。念のために言うと、真っ先に見に行っただけですが、うちの田舎には資料がないんです。だから、大正期になると、それぞれなかったような水系の問題というのが起きてきて、治水の問題というのは、いわゆる大河川ではない中小河川のところのホットな話題になっていくんですね。

**矢野** でも、そのほうが切った張ったじゃないけど……

**山崎** 本当にそうなんですよ。むしろ小さいからこそ切った張ったになる。大河川だと、金がかかりすぎて切った張ったなんてやってらんないんです。だから、国からどうお金を取ってきて、技術をどうするかという、そういうグランド・デザインに入ってくるんですね。

**矢野** ちなみに、柏競馬場は昭和初期にできたそうなんですけど、車の駐車場とかはあったんですか。

**山崎** それは、昭和3年にいまの豊四季という地域にできるんです。それで、柏の駅から離れているので、乗合自動車で送るんですね。

**古川** 臨時の駅ができるんですよ。

**山崎** そうそう。実はその競馬場の影響で豊四季駅という、あれは昔、柏競馬場……

**古川** 豊四季との間に臨時の駅ができて、そこで人が降りるんじゃないの。

**山崎** そうです。柏競馬場正門前駅とかいうのができるんですよ。そこから上野まで直通運転をして、競馬開催日になると3日間で60万人の人が来たというぐらいで、これは相当な数ですよ。いま日本ダービーでせいぜい10万人ですから、3日間で60万人が競馬場に来るとするのは、あの当時どれほどの事態だったかというのが分かりますよね。

**矢野** 客っていうのは東京市部からも来るわけですから。

**山崎** 客は東京市部から来るんです。あの辺りにはそんなにいないんですよ。柏っていうのは真面目な農村なんですよ。

**矢野** ちょうど埼玉もそうなんですよ。府中競馬場が昭和の初期にできるんです。それで新聞を見ていると、駐車場がすごいんですよ。例の黒塗りのでっかいあれがズラッと

並んでる写真を僕は見たことがあるんだけど。

**山崎** 駐車場そのものはありますよ。それで、あそこの競馬場は春と秋に3日間ずつしか開催しないので、それ以外は、馬場の中にゴルフ場とかあったりして結構、皇室の関係の人とかが、黒塗りの車を止めてゴルフをしている写真が残ってますからね。

**矢野** 防空訓練なんかもそこでやるんですか。

**山崎** そこまでは僕には分からないな。分からないけれども、東京市部のほうで運動場がないところの青年団とかがよくやって来て、そこを貸し出して内馬場とかでやったりしますよ。だから、そういう意味では、市民統合の戦時体制作りみたいなところにも多少、何らかの寄与をしたという評価になるのかどうかは分かりませんが、その辺りはご専門の方に。

ただ1つ言えるのは、駐車場とかはあるんですけども、殆どの人は車では来ないということです。殆どみんな柏駅まで来て、そこから乗合の車に乗ってやってくる。もちろん吹っ掛けるらしいんですけど、それがよくないので、仕方がないから鉄道の駅を作って、停車場を作って、それで人々がそれを使えるようにと。

**矢野** 競馬場ができて、それで鉄道が……

**山崎** いや、鉄道の中に駅ができる。それは通過していくので駅を作る。そこと柏をつないで、さらに柏と上野をつないでと。

**古川** きょうもその前を通ってきた。

**山崎** 古川さんはそっちですもんね。それを通過して来るという、まあ、そんな感じでやってきましたね。

**矢野** 柏のあれを見ていたら、大正末から昭和初期の関東大震災後の地域の振興というか、郊外化の典型的なね。

**古川** それでいうと実はもうちょっと前から、キックマンの関係で清水公園というのが開発されて、それで春に桜とかを見に行くというので、新聞に『直通電車が走ります』って広告が載るんですね。

**山崎** それにも僕、柏で関わってますよ。あと、誘客誘致っていうコーナーがバツと来てまして、山崎君がいいだろうとかって回ってきたので、そこで書いてるんですよ。花見の関係とか、弁財天の何とかとか。

**古川** そっちが多分、先なんじゃないかな。

**山崎** そうですね。競馬というだけではなくて、いろいろとからめながらそういうものを見る必要があるんでしょうね。

**伊藤** その競馬の問題というのは、日本の全体の政治なり社会なりの流れの中で、どういうふう位置づけていくんですか。

**山崎** いまとりあえずは植民地のほうでやってるので、日本の競馬そのものに関しては、やろうとしたら相当の時間がかかると思うんですよ。資料を集めるとかにしても。だから、

そこの見通しを示せと言われると困るんですけど。

**村瀬** 失礼だけど、政治史よりは社会史の問題だろうと思いますからね。

**山崎** そういう気がしますね。だから、地域政治的なものとのからみだったらいくらでも書けるんですけど、中央政治とのからみということになるとやっぱり、条約改正ぐらいの頃ですけど。まあ、そのあとは軍との関わり程度しかね。だから、あまり競馬が財政的に大きく影響するというものもないので、それはまた考えますけど。というか、そもそもそっちへ行くかどうか私自身からないので、もしそっちの方面に行くのであれば、何か考えないわけにはいかないでしょうけど。ただ、植民地で言うならば結構、重要そうだなという気がするんです。

**伊藤** どういうふうに関係あるんですか。

**山崎** きょう述べたようにです。

**伊藤** 財政的な話とか娯楽の話。

**山崎** 娯楽の話と財政的な話。どれほどのものかと言われるとよく分からないんですけど、それは今後の課題ということで。

何か意味づけは考えたいなと思っているんですけど、とりあえずいまデータを集めないで意味づけを考えるまでもないです。

**伊藤** 競馬にそれだけ人が集まるということは、要するに、金がなければいけないわけだから結構、みんなお金を持って集まるわけでしょう。かなりリッチな社会だなと思ったんですけどね。

**勝村** しかし、競馬ってあんまりお金を持って行かないんですよ。いっぺん調査がありましたけど、いまでもあまり持って行ってないんです。余計にあれしているのは特殊な人間なんですよ。

**古川** 「タテヤロクゾウ」の日記を起こして、ゲラをいま校正しているんですけど、新疆に住んでいて、家の近くが競馬場なんですよ。それで1回だけ行くみたいですけど、やっぱりそんなにお金を持ってなさそうな人も、要するに、普通の人がいっぱい来て楽しんでる感じのようです。

**伊藤** だけど、楽しむためには馬券を買わないとしようがないでしょう。

**古川** 要するに、使っているお金は映画に行くのと同じぐらいなんじゃないですか。

**山崎** 競馬の素人を連れて行くときに、「1レース100円だから12レース買っても1200円だよ。映画よりも安いよ」というのは（笑）、よく最初に使う用語ですけどね。それがだんだんエスカレートしてくるじゃないですか。3000円から5000円、5000円から1万円と。

最近のデータで言うと大体、中央競馬で平均4万円ぐらい、公営競馬で2万3000円ぐらいとかいうデータがありますが、この当時も多少の統計はあるので調べれば分かるんですけど。

**季武** 僕はギャンブルとか分からないけど、要するに、競馬になるか、丁半博打になる

か、マージャンになるかというところなんじゃないかなと思うんだけど。

**山崎** 競馬にはイベント性があるということは間違いないですけどね。それはちょっと、僕はいまの段階では論議できないですね。いずれ論議できるようになったら、学会か何かで一発報告してみようかなと思ってますけど。

**村瀬** かつて競馬場があった町っていうのは柏だけじゃないだろう。

**山崎** いっぱいありますよ。

**村瀬** 八王子とか、戸塚とか。

**山崎** 松戸辺りもありましたしね。松戸競馬場、市川競馬場とかね。

**村瀬** だから、いろんなところのケース・スタディを積み重ねるほうがいいんじゃないかな。

**山崎** そう思うんですよ。それは言われてもしょうがないんですけど、ただ、それが大きな全体的な話はどうつながるかなというのは、やはりこんなような話の積み重ねかなという気もするので。

**伊藤** だから、ケース・スタディでどんどんやっていってもいいんじゃない。

**山崎** そうですか。

**矢野** 競馬場って、戦前も戦後もつながっている競馬場と、戦後廃止された競馬場というのは、極めて政治的な要因でそうなっちゃうんですか。まだ分からないでしょうけど、府中の競馬場はずっと続いているじゃないですか。

**山崎** 中央と地方がまた違うんだな。中央の競馬場というのは、基本的に戦前、戦後とつながるんです。京都にしても宝塚にしても、府中もそうだし、まあ、中山は戦後ですけど、基本的にはそんな感じにつながっていきます。ところが、公営競馬っていうのは、これは町の財政と密接に結びついているので、不況になって金も入らなかつたら潰れちゃうんです。やっぱり馬を飼うのにお金がいるし、しかも財政規模が大きい自治体ではね。だから地方競馬のほうが、戦前から戦後にかけて目まぐるしい改変が行われます。

**伊藤** 武田君どうですか、少し質問しては。

**武田** 私はたいへん面白く、知らないことをたくさん聞かせていただきましたので。

**季武** お願いということで一言、きょうの話聞いても、やはりそれぞれの個人の集積というのは相当大きなものがあると思いますので、この前お配りしたと思うんですが、6月ですか、恐れ入りますけれども、個人が知っている細かな情報を集めて何とかいいデータベースを作ろうと思いますので、ご協力をお願いしたいと思います。それで、今年度で少し使えるようなものを作りたいし、2年度で最終年度ですので、年が明けたら報告書も書かなければいけないと。その報告書もあとにつながるようなちゃんとしたものを書きたいと思いますので、どうぞそれまでにいろいろご協力いただきたいと思います。

**伊藤** それで、今年の暮れにまた続きで科研費の申請をやろうと思ってます。そうしないと、いま作ったホームページを維持していくこともできなくなるということですので。で

きなければ、どこかから寄付を集めてくるか何か考えなければならぬんですけど。

それからお願いですけれども、あなたが知り合ったかなり熱心な地方の学芸員、こういう資料館の専門家の人たちをぜひ紹介してください。今度また通信を再開できるので、そういう人たちにも呼び掛けていこうと思っておりますので。

**山崎** 関東方面は桜井さんのところが主催されてますので、桜井先生編で今度、各県で中心の資料館員の人が、それぞれの県の政治情勢を日露戦後にしぼってまとめていく、なんて本でしたっけ？

**桜井** まだ題名は決まってません。

**山崎** 決まってないんですか。でも、もう出るんでしょう、10月か何かには。私が引き延ばしてますけど。

**桜井** 山崎さんが早く出してくれれば（笑）。

**山崎** きょう一応、全部持ってきました。近代日本の地域と政治とか……

**桜井** それもまだ決まってないです。

**山崎** 決まってないんですか。まあ、そういう本が多分出るだろうと思いますので、お買い求めいただけたらとつくづく思うんですけど。その中で書いているメンバーはいいメンバーですよ。最近、よく研究したり論文を書いたりもしているのです。

**伊藤** 通信はこれから持ち回りでスポンサーを探すことにいたしまして、次回は吉川公文館がスポンサーになってくれるということですので、それをやったら今度は山川に持ってくるとか、そういうふうを持ち回りでやろうと思っておりますので、しばらく続きますのでよろしくをお願いします。

山崎君はいまメンバーになってますか？ まだなっていない。じゃあ、ぜひメンバーになっていただいて、ホームページの裏ページのメンバーです。きょうのご報告も、手を入れていただいて討論とともに裏のほうに入りますので、よろしくチェックしてください。そのうち速記録が行きますので。

武田君のほうから、いまの状況をご報告してください。

**武田** アルバイトの方に入力を手伝っていただいて、私の仕事の3倍ぐらいのスピードでカタカタと打ってくださって、順調です。

その他、あとで封筒を持ってきますけれども、いま手元にある段階のものを追って、そのときに出席なさっている先生で、あまり発言されなかった先生かどうかまだチェックしてないんですけども、その分を先生方にお渡ししますので、それになるべく早く赤を入れて返していただければ早くホームページに掲載できますので、よろしくをお願いします。

**伊藤** きょう配れるものはあるんですか。

**武田** あります。完成したやつではなくて、お願いするやつですが。

**伊藤** 出来上がったものは？

**武田** 出来上がったものはまだないんです。



**伊藤** それで、次回をどうしましょうかということなのですが、どなたかご推薦なさる方はいらっしゃいますか。僕は、高村先生に頼んで横浜市史の人を誰か推薦してもらったり、あるいは高村先生自身に話してもらったりしようかなと思っておりましたが、それよりはこっちのほうを急げというのがあれば、また別なことを考えますが。

あと、開港資料館の比良さんに一応、秋になったらというようなことを言っておりますので、開港資料館のお話も伺ったほうがいいんじゃないかなと思うんです。この前、季武君と2人で開港資料館に行って随分長い時間、説明を受けたんですけども、メモを取っているところの話ではなくて、ボンボン…ボンボン話があって、次の話を聞いているときにはもう前の話が分からずという、こういう感じで説明を受けたものですから、やっぱり速記がないとこれは無理なんですわね。

それでは一応、その2人にあたってみるということでもよろしゅうございますか。また8月の末ぐらいに設定したいと思いますが、今度は山崎君にもご案内を差し上げますので、ご都合がつけばいらっしゃってくださいませ。交通費は出すということですので、よろしくお願いいたします。

あとは季武君と少し相談して、概要とか出版物とか、そういうことをどういうふうにしてやっていくか、それを近々に相談したいと思います。

それから、有馬君も1度ぐらい報告をしていただけますか。

**有馬** 断片的な情報をザッと並べるというのもいいんですか。

**伊藤** それでいいですよ。そんな系統だったわけではないんだから。

このリストは山崎君にもやってください。いままでの分の速記も、まだ有山君のだけでしょう。だから、きょう皆さんにお渡しするものを渡して、食事の間にパラパラと見てOKというのがあれば、みんな簡単じゃないですか。

きょうは食事を準備しておりまして、食事が5時半につくことになってますが、それまで引き延ばしをいまやっているわけです(笑)。発言してない人、何か言ってください。**伊藤** さん、どうですか。

**伊藤** (光) いえいえ、競馬でもってすっかり感激してましたから(笑)。

**櫻井** 競馬は分かりませんが、馬術はどうなんですか。

**山崎** それは全然分かりません。いままで考えたこともないです。

**櫻井** でも、同じ馬を使うわけですから……

**山崎** ええ、ありますね。

**有馬** 僕はあまりよく知らないけど、競馬と軍の関係って、要するに、馬匹改良なんだけど、市場原理を入れないとよくなるという話なんでしょう。

**山崎** そうそう。だから、馬券を売るか売らないかというのは、全部そこで語られるんですよ。売ると治安が悪くなるし。

**伊藤** 櫻井さん、どうですか。

**櫻井** いま馬術はどうなんだと言ったんですけど (笑)。やはり、地方史レベルのものをいかに中央に研究者……まあ、みんな関わっているんでしょうけれども、いかに1つのところに史料があるか、その場合やはり、何かをするにはこれがいいということが分からないと、何々家文書では絶対分からないわけですね。

**季武** 早い話、競馬でもいいわけですよ。競馬というのを調べたいと思ったら、どうい資料があるかが分かればいいわけですよ。

**山崎** だから、キーワードで競馬をぶち込んでおいて、競馬って押した瞬間に、このテーマでこのテーマというのが出てくれば最高ですよ。

**櫻井** それでもやはり、見た人がそういうふうに思っただけの話になるかもしれないですよ。

**伊藤** キーワードがべらぼうに1つの文書の中から拾い出せるわけですからね。だから、これは偉いことだなと思いますよ。

**有馬** だから、そういうものの完全な形を目指すかどうかだと思うんですよ。目指すのがいいかどうかという問題が多分あるんですよ。

**伊藤** 山県文書なんかを見てキーワードを選べと言ったら、これはたいへんですよ。

**季武** キーワード自体が研究をかなりしているわけですから、新しい研究が始まるというのは、新しいキーワードを作るみたいなのところもありますから。

**勝村** この頃のウェブというインターネットは、キーワードも要らなくなってきたんですね。自動的に全部切り出してしまいますから。それで今度、日本のサーチエンジンが問題なんですけど、優秀なサーチエンジン——グウとかインフォシークとか、ああいうところに入っているいくつかのものは、ホームページのタイトルを自動的に切り出して配信してくれますので、ホームページの上に乗っかってさえいけば勝手にやってくれるんですね。だから、こちらが何も知らない間にできてしまうと。まあ、いいような恐ろしいような状況ですね。

**伊藤** ホームページの中に入っている言葉でも……

**勝村** いまのところのウェブのサーチをしているのは殆どタイトルだけです。だから、ホームページの中の用語までやっているようなサーチエンジンはいまはありませんが、しかし、そのうちにウェブサーバーが大きくなってきますと、そういうことをやるところが出てくると思うんです。だから、とにかく表示されていることが前提ですから、それはきつともう間もなく出てくると思いますから、我々はあまり自分たちで切り出すことを考えずに、それはもう自動的にやれますから。

**伊藤** いろいろ苦心惨憺したやつが、あとで簡単なことになるということですからね。

**勝村** そうだと思いますよ。

**伊藤** 他にもどうですか、このついでに言っておく話はありませんか。

矢部文書の目録はどうですか、やり始めています？

**矢野** まだです。

**伊藤** 夏休みにやってくださいよ。

**矢野** いや、その指令が来るのを待っているんですよ。もうスタンバイしているんですけど。

**伊藤** (笑) とっくに始まっているかと思ってたよ。でも、大体こんなところから始めようとかで選んだんでしょう。

**矢野** いや、まだ全然。だから、それもちょっと遅れているんですけど、その辺のことを打合せしようと思っているんですけど。

**伊藤** じゃあ、食事をしながらやってください。

それでは、正規の会議としてはこれで終わりにします。(第9回終了)

—